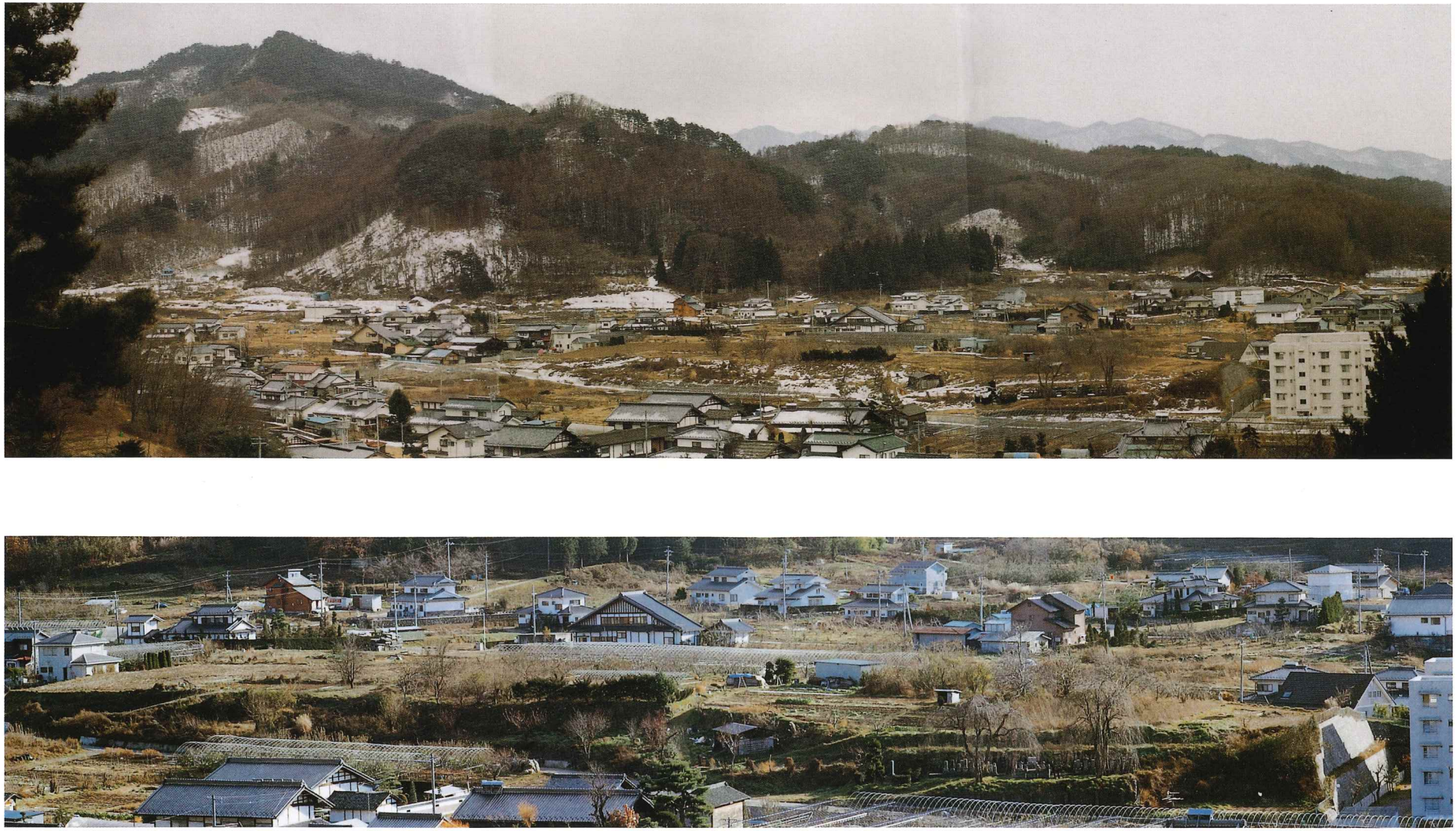
巻頭図版



西権現通三角点（777.5m）から南東に月夜平を望む（由井俊三　撮影）

1999年

月夜平遺跡

平成11年3月

長野県南佐久郡臼田町教育委員会

序

臼田町教育委員会
教育長　三 石 秀 寿

月夜平遺跡のある周辺一帯は、多くの文化財に恵まれている。代表的な文化財は北東側に大宮諏訪神社があり、ここに長さ152㎝の磨製の大石棒が奉納されている。これは、昭和８年ごろ入沢・十日町線の道路改修工事のときに出土し、工事請負業者が翌年の大宮諏訪神社のお祭りの日に神社へ奉納したという経過がある。神社の宝物としては、「大宮英田神　永和二年」と陰刻された鰐口がある。永和２年は1376年で北朝の年号にあたるので、大宮諏訪神社の古さを物語る宝物である。また、東方に入沢城があり、城主を裏付ける文献史料、『諏訪御符札の古書』に、応仁３年（1459）入沢長助・文明14年（1482）入沢長義の名が記されている。さらに山麓には創建年代不詳といわれる八幡社が厳かなたたずまいをみせ、天文18年（1549）開山された吉祥寺がある。入沢城の南方に十二山城が、北方に磯部城があり両城は地形的・規模的な面からみて、入沢城の防衛拠点としての砦であると考えられている。また、磯部城の南麓には薬師堂があり、薬師三尊像が安置されて、鰐口に1665年の銘・手洗石に万治３年（1660）の銘があるから、薬師堂の創建はこれより古いとおもわれる。

こうした歴史の深い土地に、平成６年から９年にかけて町単土地改良事業農道整備計画により、農道が新設される運びとなったため、平成７年と９年度に発掘調査を実施した。４ｍの道幅を調査するので、横に続いている住居は二分の一とか中途半端な形で確認されるため、心残りの調査となったことは致し方ない。

縄文中期末の住居址３軒・集石などを共なった特殊遺構２・平安時代後半の住居址２軒・溝状遺構１が発掘された。今回の調査で判明したことは、遺跡は一段高い台地を中心に分布していると考えられているが、台地から一段下った窪畑・三枚田の果樹園・畑付近まで遺跡の範囲が広がった。著名な遺跡でありながら学術的調査のメスが入らなかったため、遺跡の年代は既出遺物により想定していたが、詳細な時期決定が出来るまでに至ったことは意義深い。

また、発掘調査にあたり新設道路周辺の住民の方々にご迷惑をおかけしましたが、あたたかいご理解とご協力のもとに調査が出来たことをお礼申し上げます。終りに南佐久町村会ならびに南佐久郡誌刊行会からは、島田恵子発掘担当者を派遣していただき、発掘調査と報告書作成にご尽力いただいたことに対し、衷心より感謝申し上げます。

平成11年３月３日

例　　言

1．本書は、長野県南佐久郡臼田町大字入沢3129の9番地外に所在する月夜平遺跡の調査報告書である。

2．本調査は、臼田町農林課の町単土地改良事業農道整備計画に先だって、臼田町教育委員会が実施した。

3．本調査は、長野県考古学会員三石延雄を団長とし、南佐久郡誌刊行会の全面的協力のもとに、佐久考古学会員、地元入沢他の方々の協力を得て実施した。第１次調査は、平成７年６月22日～７月18日まで実施し、第２次調査は平成９年９月１日～15日まで実施し、整理および報告書作成は平成10年９月１日～３月まで行った。

4．本調査報告書の作業分担は以下の通りである。

現場遺構実測図作成――佐々木春蔵・柳沢春子・島田恵子

遺構実測図の整理・トレース――島田恵子

遺物洗浄・註記・復元――佐々木春蔵・新津きし・島田恵子

遺物実測・トレース――島田恵子　　石器の実測・トレース――吉沢　靖

拓　　本――新津きし

図版作成――島田恵子

5．本書の執筆は、由井俊三・島田恵子が主に行った。尚、文責は文末に明記してある。

6．本書に掲載した遺構・出土遺物の写真は、島田が撮影したものを使用した。

7．本書の編集は島田が行い、三石延雄団長が校閲・監修した。

8．本遺跡の資料は、臼田町教育委員会の責任下に保管されて、臼田町文化センターに展示されています。町民の皆さんに広く活用していただきたい。

凡　　例

1．各遺構の略号は、次のとおりである。

縄文時代住居址――Ｊ　　特殊遺構――Ｔ　　平安時代住居址――Ｈ

2．住居址の記述は、検出位置とその状況――平面形態――壁高――覆土――床面――柱穴――炉――出土遺物の順になった。

3．遺構実測図の縮尺は、次のとおりである。（挿図中にスケールを付し、縮尺を明示した）

住居址・特殊遺構――１／60　　炉・カマド１／30　　溝状遺構１／90

4．遺物実測図の縮尺は、次のとおりである。（挿図中にスケールを付し、縮尺を明示した）

土　器――１／３・１／６　　石器（磨石・敲石）１／４　　（石斧・鎌類）１／３　　（石鏃）１／１

5．図版の遺物の縮尺は、次のとおりである。

土　器――１／３・１／６　　石器類――１／４　　石　鏃――１／１

6．住居址実測図の中のスクリーントーンは、炉・カマドを示す。

7．土器実測図中のスクリーントーンは、内面黒色土師器・灰釉陶器・須恵器をあらわす。

8．水糸レベルは、各遺構ごとに明記した。

9．写真図版中では遺物番号を簡略化した。例えば、第７図１は７－１とした。

本調査・報告書作成にあたり、地元入沢の三石晴子・三石まつ子・日向勝一・高橋保治各氏には物心両面にわたるご協力をいただきました。また、農林課の篠原正史、高見沢忠氏に種々おせわになりました。ご芳名を記して厚くお礼申しあげます。

本　文　目　次

巻頭図版
序……臼田町教育長　三 石 秀 寿
例言・凡例
本文目次・挿図目次・図版目次
第１章　発掘調査の経緯……1
第１節　発掘調査に至る動機……1
第２節　発掘調査の概要……1
第３節　発掘調査日誌……2
第２章　遺跡の環境……4
第１節　月夜平遺跡付近の自然環境（地形・地質）……4
第２節　考古学的環境……7
第３章　層　序……12
第４章　遺構と遺物……14
１　住居址……14
１）Ｊ１号住居址……14
２）Ｊ２号住居址……17
３）Ｔ１号特殊遺構……18
４）Ｔ２号特殊遺構……20
５）Ｈ１号住居址……22
６）Ｈ２号住居址……24
７）トレンチ出土の土器……25
第２次調査
８）溝状遺構……26
９）Ｊ３号住居址……28
第５章　まとめ……35

挿　図　目　次

第１図　月夜平遺跡地形図及び発掘区設定図…3
第２図　周辺遺跡分布図……8
第３図　銙帯模式図……11
第４図　層序模式図……12
第５図　第１次調査区検出遺構全体図……13
第６図　Ｊ１号住居址実測図……14
第７図　Ｊ１号住居址出土土器実測図……15
第８図　Ｊ１号住居址出土把手実測図……15
第９図　Ｊ１号住居址出土石器実測図……15
第10図　Ｊ１号住居址出土土器拓影図……16
第11図　Ｊ２号住居址実測図……17
第12図　Ｊ２号住居址出土土器拓影図……17
第13図　Ｔ１号特殊遺構実測図No１……18
第14図　Ｔ１号特殊遺構実測図No２……19
第15図　Ｔ１号特殊遺構出土土器拓影図……19
第16図　Ｔ１号特殊遺構出土石器実測図……20
第17図　Ｔ１号特殊遺構出土土製耳飾り実測図　20
第18図　Ｔ１号特殊遺構出土緑釉陶器実測図…20

第19図　Ｔ２号特殊遺構実測図……　21
第20図　Ｔ２号特殊遺構出土土器拓影・実測図　21
第21図　Ｔ２号特殊遺構出土石器実測図……　21
第22図　Ｈ１号住居址実測図……　22
第23図　Ｈ１号住居址カマド実測図……　23
第24図　Ｈ１号住居址灰溜実測図……　23
第25図　Ｈ１号住居址出土土器実測図……　23
第26図　Ｈ２号住居址実測図……　24
第27図　Ｈ２号住居址出土土器実測図……　24
第28図　Ｈ２号住居址出土石器実測図……　24
第29図　トレンチ出土土器拓影図……　25
第30図　溝状遺構実測図……　26
第31図　溝状遺構出土土器拓影図……　27
第32図　溝状遺構出土石器実測図……　27
第33図　溝状遺構出土石鏃実測図……　27
第34図　溝状遺構出土土器実測図……　27
第35図　礫散布状態図……　28
第36図　調査区外出土土器実測図……　29
第37図　調査区外出土石器実測図……　29
第38図　Ｊ３号住居址実測図……　30
第39図　Ｊ３号住居址炉・埋甕実測図……　31
第40図　Ｊ３号住居址出土土器実測図……　31
第41図　Ｊ３号住居址出土土器拓影図……　32
第42図　Ｊ３号住居址出土石器実測図……　32
第43図　Ｊ３号住居址出土石鏃実測図……　33
第44図　Ｊ３号住居址出土その他土器実測図…　33
第45図　月夜平遺跡出土の磨製石棒……　35
第46図　月夜平遺跡出土の弥生中期初頭の土器　36

付　表　目　次

第１表　月夜平遺跡発掘調査・報告書作成工程表……　2
第２表　周辺遺跡一覧表……　9
第３表　月夜平遺跡出土石器一覧表……　34

図　版　目　次

図版１　Ｊ１号住居址と出土遺物
図版２　Ｊ１号住居址出土土器片
図版３　Ｊ２号住居址出土土器およびトレンチ出土土器片
図版４　Ｔ１号特殊遺構と出土遺物
図版５　Ｔ２号特殊遺構と出土遺物
図版６　Ｔ１号・Ｔ２号特殊遺構・溝状遺構出土土器片
図版７　Ｈ１号住居址のカマド・灰溜施設
図版８　Ｈ１号住居址出土遺物とＨ２号住居址出土遺物
図版９　層位・遺構観察のトレンチ
図版10　溝状遺構と出土遺物
図版11　礫群集石地点と調査区外出土遺物
図版12　Ｊ３号住居址
図版13　土器敷炉・埋甕
図版14　Ｊ３号住居址出土遺物
図版15　発掘調査区全景・スナップ

第１章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る動機

月夜平遺跡は谷川左岸扇状地の中央台地に位置し、かって縄文時代後期の長さ152㎝の大石棒、弥生時代中期初頭の土器などが出土して注目された遺跡である。

今回の調査は、農林課の町単土地改良事業農道整備計画により、新しい農道が造成されるため、月夜平遺跡の中心部からはずれた段丘下の北端部ではあるが、大遺跡の周縁にあたるので遺跡の破壊が懸念されたため、町教育委員会では記録保存による緊急発掘調査を道路の進行状態に合せて実施した。

（事務局）

第２節　発掘調査の概要

○　遺　跡　名　月夜平遺跡

○　所　在　地　長野県南佐久郡臼田町大字入沢3129の9番地外

○　発 掘 期 間　平成７年６月22日～７月18日・平成９年９月１日～９月15日

○　調査実施者　臼田町教育委員会

○　調査に関する事務局

＜第１次　平成７年度＞

新津　真澄	臼田町教育委員会	教　育　長
新海　宣幸	臼田町教育委員会	総務教育課長
三浦　英敏	臼田町教育委員会	総務教育係長
大工原すみ江	臼田町教育委員会	総務教育主任

＜第２次　平成９年度＞

三石　秀寿	臼田町教育委員会	教　育　長
土屋　雅城	臼田町教育委員会	総務教育課長
三浦　英敏	臼田町教育委員会	総務教育係長
大工原すみ江	臼田町教育委員会	総務教育主任

＜第３次　調査報告書作成・平成10年度＞

三石　秀寿	臼田町教育委員会	教　育　長
井出　　充	臼田町教育委員会	総務教育課長
三浦　英敏	臼田町教育委員会	総務教育係長
大工原すみ江	臼田町教育委員会	総務教育主任

○　発掘調査団組織

団　長	三石　延雄（長野県考古学会員）
副団長	丸山　正俊（臼田町文化センター館長）
担当者	島田　恵子（長野県考古学会員・南佐久郡誌刊行会常任編纂委員）
調査員	佐々木春蔵（佐久考古学会員）・吉沢　　靖（長野県考古学会員）
調査補助員	柳沢　春子・有井　忠雄
調査協力者	新津　きし・上原　鐳三・篠原　末三・三石　有・高橋　義保

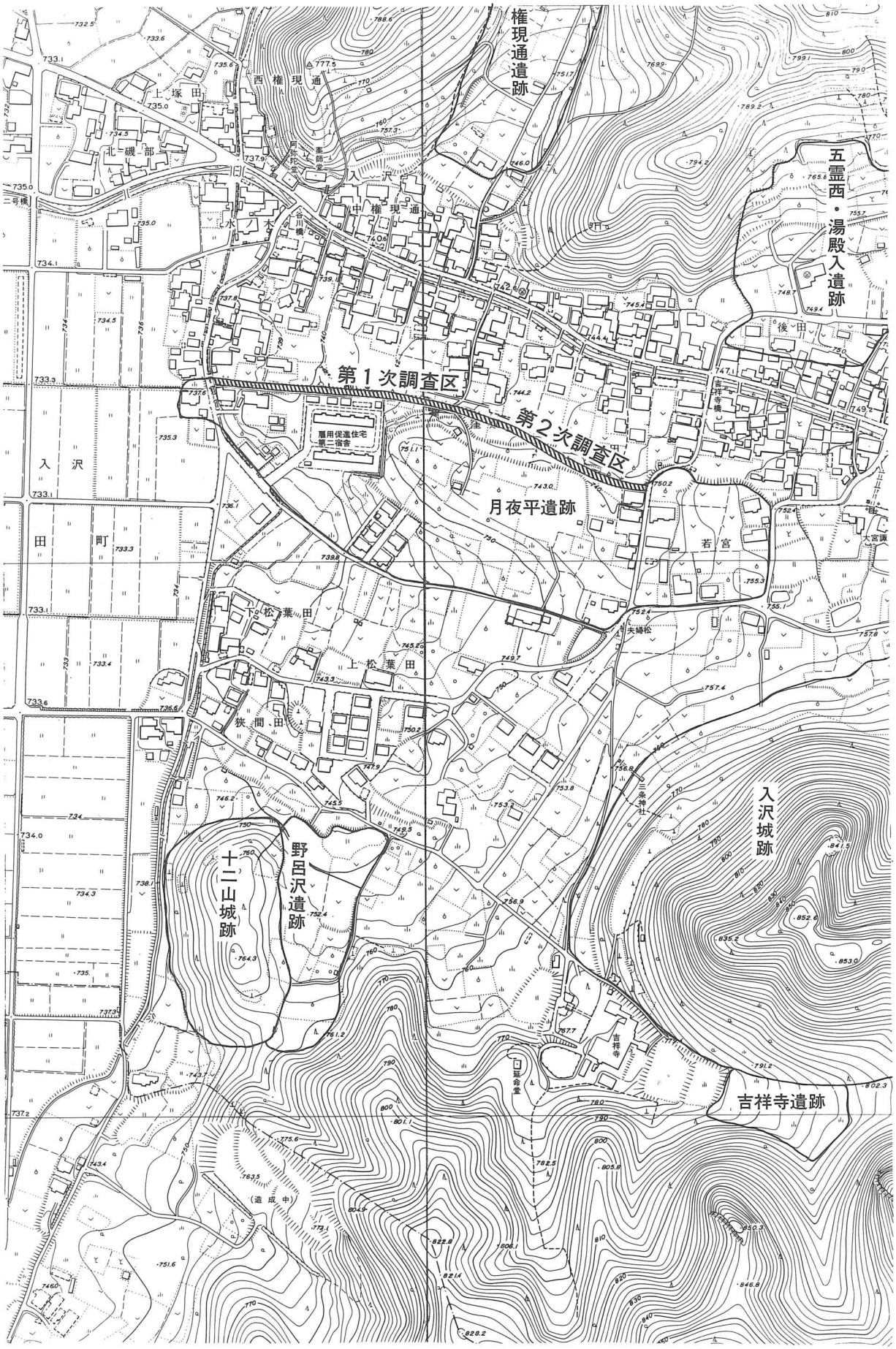
地形・地質・石質指導　　由井　俊三（前北海道大学教授　鉱床学）

第３節　発掘調査日誌

新設道路の工事は、平成６年度から９年度まで行われ、工事に合せて平成７年度から発掘調査に入った。８年度は土堤の際にあたり、遺構の存在は地形的な面から無理とおもわれたので立会調査のみ実施した。９年度に第２次調査を行い、10年度に報告書作成に入った。３年間にわたっての作業のため繁雑になるので表にまとめ明瞭にした。

第１表　月夜平遺跡発掘調査・報告書作成工程表

項目／年日	発掘調査	室内整理		
		遺構	遺物	原稿執筆・編集・図版
平成7年 6月	発掘調査			
7月		図面整理	洗浄・註記	
平成9年 9月	発掘調査		洗浄・註記	
平成10年 9月			土器・石器実測・拓本	
10月				
11月		トレース 図面整理	トレース	
12月				原稿執筆・編集
1月				
2月				校正 図版作製
3月				



第1図　月夜平遺跡地形図及び発掘区設定図

第2章　遺　跡　の　環　境

第1節　月夜平遺跡付近の自然環境（地形・地質）

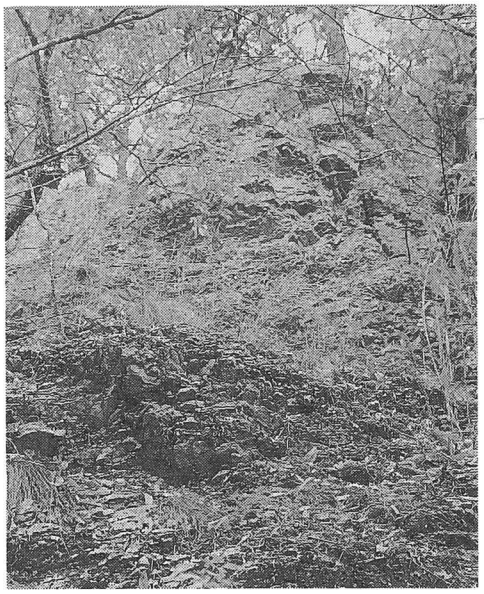
月夜平遺跡は臼田町入沢谷川（やがわ）左岸（南岸）にあり、すでに報告書の刊行されている五霊西12号古墳（報告書第3集・昭和63年3月，以下「第3集」と示す）の対岸に位置している。付近の地形・地質の大要は「第3集」に譲り、ここには月夜平の周辺のごく狭い区域に限って述べる。また歴史的な事項は青沼の自然と歴史（1965）（以下「青沼」と示す）に詳しい。地名はおもに町の基本図17・18によるが、一部は日向泰彦氏のご教示による。広域の地質については南佐久郡誌自然編上（平成6年11月）（以下「郡誌」と示す）に詳しく述べられている。

月夜平の地形の特徴は夫婦松から西北西に延び、雇用促進住宅東側の崖に至る、海抜752mの平坦面（巻頭図版参照）で、ここに月夜平4号古墳がある。その南は松葉田の凹凸ある緩斜面に続き、そこに月夜平遺跡があり、その南は吉祥寺下流の浅い谷を隔てて緩やかな山地となっている。松葉田の緩やかな谷の上流は、現在は直接入沢城の急斜面に接するように見えるが、「青沼」に述べられているように、かって、谷川がこの方向に流れていたことも考えられる。平坦面の北は高さ10m弱の崖で谷川の低地の入沢の集落に接し、その北岸のやや東方に五霊西遺跡が立地している。月夜平は谷川左岸の段丘ということもできる。

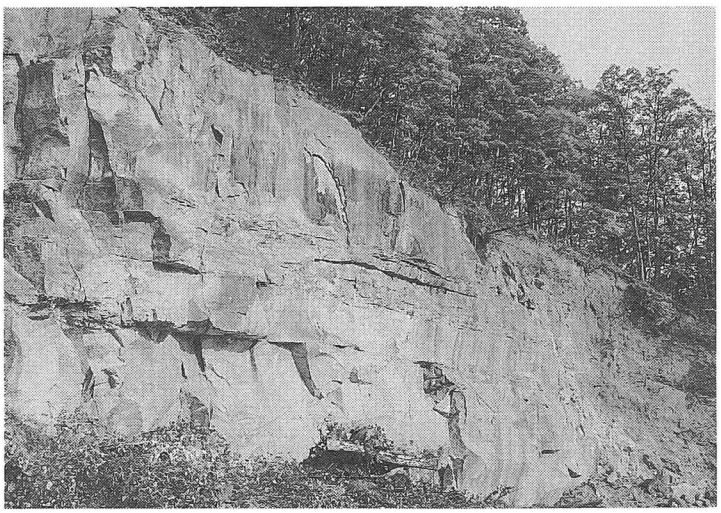
西権現通と十二山の西麓を結ぶ南北の線の西は千曲川沿岸の佐久平の南部を占めるが、谷川出口付近でやや高まり、谷口扇状地を形造っている。

月夜平の平坦面の北の崖の下部にはわずかに褐色を帯びた灰白色の火山性堆積物があり、今回調査された遺跡はその上に乗っている。平坦面の上にはロームがあり、その上部が耕作土となっている。遺跡に直接関係する地質はこの両者であるが、まずそれらの基盤となっている地質を述べる。

谷川上流の一つ石の東および北には第三紀の内山層が分布し、谷川北岸の歩道沿いに大量の内山層の礫岩の転石がある。月夜平付近では内山層は観察されず、基盤岩類としては昭和63年の「第3集」当時は秩父古生層と呼



1　城山（入沢城跡）南西斜面（吉祥寺側）
山頂直下の縞状チャート。



2　青沼小学校東、石山採石場の志賀溶結凝灰岩（佐久石）。
北部（写真では右側）に谷を埋めるように新しい堆積物が乗っている。

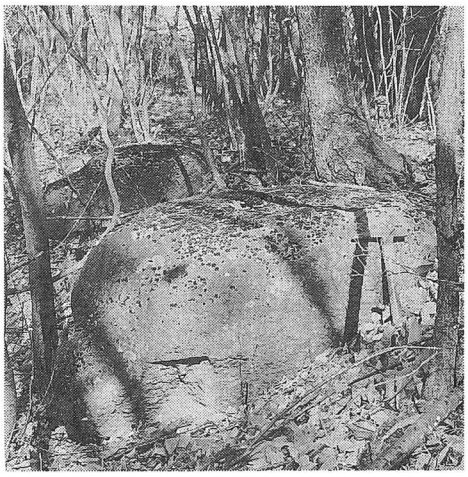
ばれていた地層と志賀溶結凝灰岩の両者が観察される。

佐久地方の古期岩類が古生層とされたのは、「第３集」にも述べられているように、佐久町一の渕の石灰岩から、古生代二畳紀のフズリナ石灰が発見されたことによる。一の渕だけでなく、各地の古生代の石灰岩の多くは地層としてではなく、砂岩、泥岩など各種の堆積岩の中にブロック（岩魂）として存在しているが、当初はまわりの岩石から化石を検出できなかったため、石灰岩の時代がまわりの岩石を含む全地層の時代を示すと考えていた。その後石灰岩以外の岩石からも顕微鏡で見る大きさの化石（放散虫）を検出できるようになり、石灰岩を囲んでいる泥岩等の多くは中生代の化石を含み、古生代の石灰岩は中生層の中に異地性岩魂として含まれていることが明らかになった。海洋プレート上で出来た石灰岩がプレートとともに移動し、大陸プレートと衝突したとき、大陸源の砂岩泥岩の中にもみ込まれたものと考えられている。さらに石灰岩だけでなくチャートも異地性岩魂であることが明らかになった。それまで古生層と言われた地層が実は中生代の混在岩であったというショックの大きさから、“放散虫革命”という言葉も生まれた。

佐久地方では北相木村から川上村にかけての岩崎ほか（1989）研究があり、チャート岩魂には「厚さ数10ｍで走向方向によく連続する大規模の岩魂まで含まれる」としている。この結果を当地区に援用すると吉祥寺をとりまく尾根に露出するチャート（10頁写真の吉祥寺の背後の露岩）は城山（入沢城跡）の東の尾根の小鞍部に見られる砂岩・泥岩中の異地性岩魂であろう。写真１は城山の吉祥寺側中腹のチャート露岩である。八千穂村高岩の天狗岩は佐久の代表的なチャートの露出であるが、そのすぐ東側を通過する発電所水路の廃石は砂岩・泥岩で、天狗岩のチャートは大岩魂と推定される。

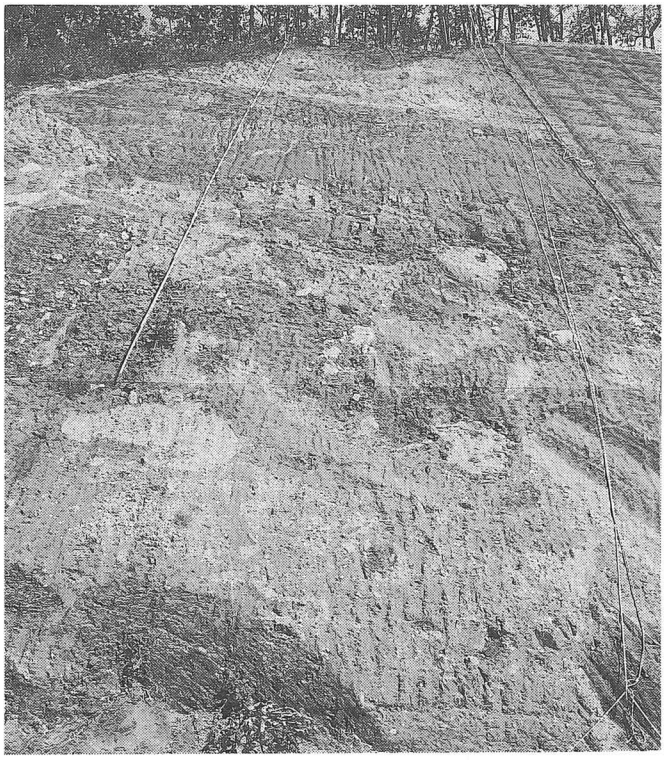
谷川の北のなだらかな山地には志賀溶結凝岩が広く分布し、その多くは休止しているが、各所に採石場（石材名－佐久石）があり、西の山麓のもの（石山）は現在も稼行している（写真２）。周辺地域では稲荷山の東麓や佐久町宿岩の千曲川河床に溶結凝灰岩が露出している。「郡誌」の地質図では谷川の南、吉祥寺周辺には志賀溶結凝灰岩が示されていないが、吉祥寺の南の尾根の海抜800ｍ付近（写真３）から十二山にかけて志賀溶結凝灰岩が分布している。巻頭写真（上）の背景の山々のうち東半（左）の凹凸のある部分は秩父帯のチャートほか、西半（右）のなだらかな部分は溶結凝灰岩である。吉祥寺の池辺の石組みには溶結凝灰岩が使われているが、少なくともその一部は原地性の可能性がある。

溶結凝灰岩については幸神古墳群（報告書第11集・平成８年３月）（以下「第11集」と示す）に詳しく述べられている（５－６頁）が、厚い火砕流堆積物の中心部が溶結したものである。その底部と表層部は冷却が速いた



３　吉祥寺南側尾根上の
志賀溶結凝灰岩（佐久石）。

４　月夜平北斜面の岩屑流堆積物（海の口泥流）。



5　離山西側県道拡幅工事（平成９年）によって露出した
岩屑流堆積物（海の口泥流）。上部にある大岩塊の横幅は15m

6　月夜平の平坦面に乗るローム層

め溶結せず、火山灰層となっている。羽黒山の西麓には佐久石採石場跡があるが、その上部の山頂運動場には非溶結の火山灰がある。南麓には基盤岩類（“秩父古生層”）の上に乗る志賀溶結凝灰岩の底部の非溶結部が露出している。

北方の田口地域では志賀溶結凝灰岩の上に、水落観音玄武岩と名付けられた溶岩が水落観音から西に漸次高度を下げながら分布し、西端は稲荷山に達しているが、谷川の北岸には見当たらない。

月夜平付近では志賀溶結凝灰岩は露出せず、その岩相から海の口泥流と推定される堆積物が露出している。海の口泥流については八ヶ岳団体研究グループ（1988）に『分布：南牧村海の口から北東麓の浅科村御馬寄付近までの千曲川沿いに“へばりつき”の状態で局所的に分布する。層厚：30m　層相：本層は、角閃石含有両輝石安山岩、基盤岩のチャート、砂岩の礫を含み、径２～３mm（の）角閃石含有白色軽石を特徴に含む、基質は、淡黄灰の火山灰質な細粒砂である。ブロックとしてはシルト層、砂層、細礫層、凝灰角礫岩及び千曲川泥流などを含み、その大きさは、10m×４mを超えるものもある。』（p.101）と述べられている。

佐久町－八千穂村境界部の国道141号線のすぐ西側の、小海線の車窓からも遠望できる崖の地層は「郡誌」地質図に海の口泥流と表示されている。そのすぐ北に位置する佐久町高野町諏訪神社切通しに露出する地層は、その位置と岩相から海の口泥流と推定される。今回の発掘現場に現れた地層と新設道路から月夜平に上がる農道に露出する地層は、写真４に見られるように、ハンマーの跡がはっきり残り、崩れない程度に固結した火山灰質の地層で、露出の小さいこともあって上記の海の口泥流の記載のすべてと一致するわけではないが、諏訪神社切通しの地層と酷似することから海の口泥流と判断される。吉祥寺南側の臼田町－佐久町境界尾根の佐久町側斜面の宅地造成地では、上記の記載とよく一致する海の口泥流が志賀溶結凝灰岩を鋭い接触面で覆っている。

臼田町離山は主に志賀溶結凝灰岩よりなるが（「第11集」）、平成９年に行われた県道の拡幅工事で、その西山腹に“へばりつき”状に分布する海の口泥流が現れた（写真５、館報臼田第445号　平成９年12月１日参照）。臼田町出身の火山地質の専門家、河内晋平氏（信大教授）によるとこの堆積物は、成層したブロックが含まれているので、火山崩壊物の水の少ない流れの堆積物で、泥流というよりも岩屑流というべきものである。昭和59年の

長野県西部地震で御岳頂上部の崩壊で生じた岩屑流が下流では谷に入って泥流となったように、同じ堆積物が部分的に岩屑流、泥流の両方の性質を持つことがある。

月夜平の平坦面を覆うローム層（写真６）は海の口泥流を覆うので中部佐久ローム層より新しいが、さらに細かく分類したときの層準は明らかではない。（由井俊三）

文　献

青沼の自然と歴史刊行会，1965，青沼の自然と歴史，360p，同会

五霊西12号古墳発掘調査団，1988，臼田町埋蔵文化財調査報告書第３集　五霊西12号古墳，52p，臼田町教育委員会

岩崎敏典，指田勝男，猪郷久義，1989，関東山地北西部、長野県南佐久郡北相木－川上地域の中生界，地質雑 v．95，733-753，

幸神古墳群発掘調査団，1996，臼田町埋蔵文化財調査報告書第11集　幸神古墳群，131p．＋（４＋36）図版，臼田町教育委員会

長野県南佐久郡誌編纂委員会，1994，南佐久郡誌　自然編（上），867p．長野県南佐久郡誌刊行会

八ヶ岳団体研究グループ，1988，専報34号　八ヶ岳山麓の第四系，275p．地学団体研究会

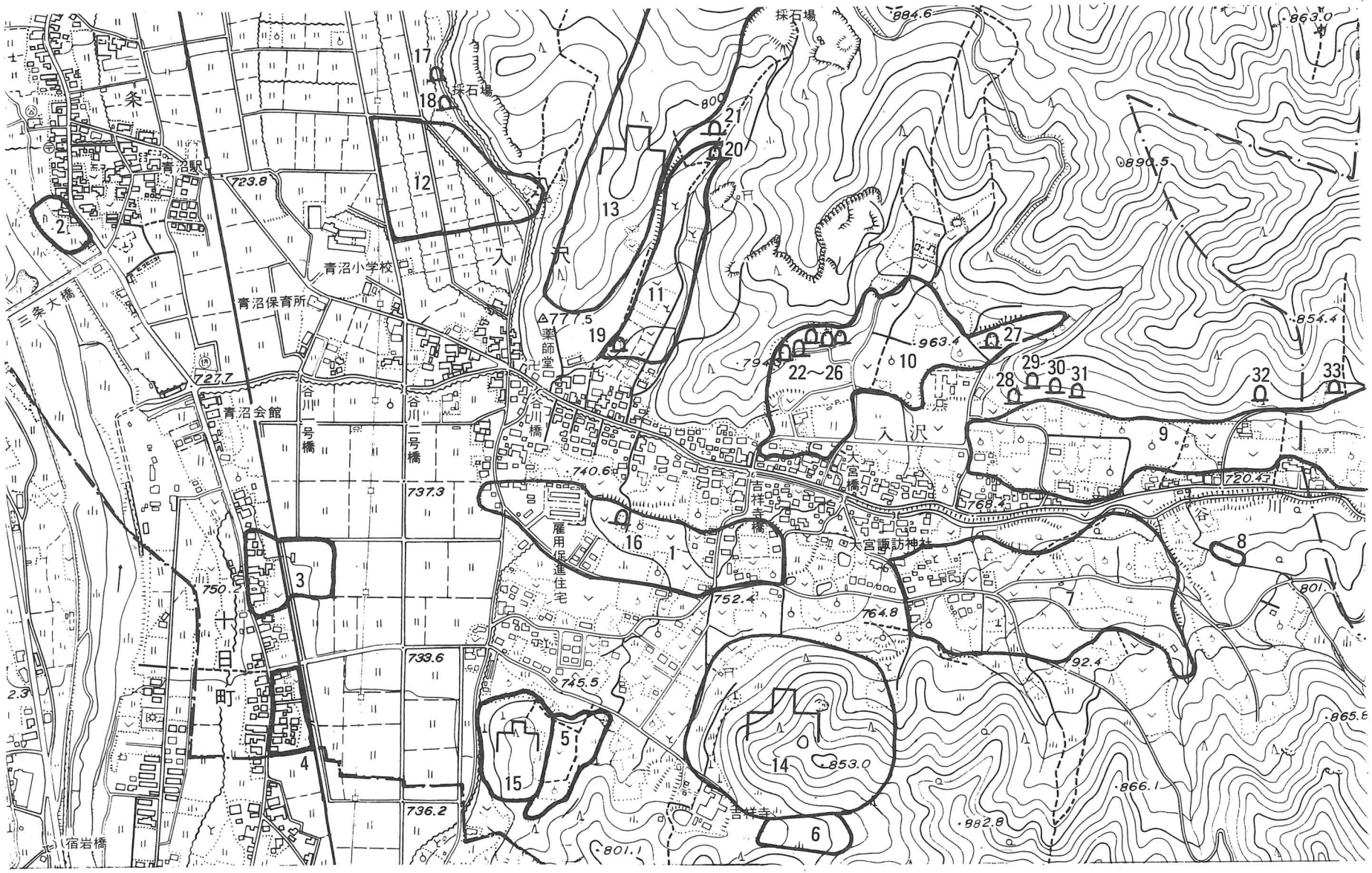
第２節　考古学的環境

入沢集落の真中を流れる谷川左岸の中央台地に位置する月夜平遺跡は、早くから注目された遺跡であった。先ず、昭和８年ごろ入沢・十日町線の道路改修工事を行ったとき、上磯部地籍の田口用水西側の石垣が一部分改修された。その根掘りのときに土の中に横転していた石棒が発見され、翌９年４月15日の大宮諏訪神社のお祭りにあたり、当時の工事請負業者が神社へ寄贈したので神社の宝物として現在に至っている。石棒は、長さ152㎝、最大径17㎝で、全体が研磨されており、精緻な作りと芸術的な形状が一段と美しさをかもしだしている。

さらに、昭和32年に一部発掘調査が国学院大学によって実施され、弥生時代中期初頭の東海地方の影響を受けた土器が出土し、耕作中に縄文中期後半から後期の土器や石器、弥生時代後期の箱清水式土器、奈良・平安時代の土師器や須恵器などが出土している。遺跡が登録されたとき、縄文時代前期の諸磯式土器が出土していたと報告されているが、現在までのところ諸磯式土器は発見されていないので、なにかの見まちがいだったとおもわれる。月夜平遺跡は、縄文時代中期後半～中世に至るまでの複合大遺跡であり、古墳も１基ある。今回は台地から一段下がった北側の調査であった。２は、三条大橋北側に位置する南裏遺跡である。千曲川右岸の氾濫原に所在するが、土師器が採集されている。３と４は十日町に所在する遺跡で、３は、東荒谷遺跡である。水田から石鏃が出土し、畑から土師器が出土している。４は、国重要文化財の六地蔵幢が所在する十日町遺跡である。永享12年（1440）造立の年号が刻まれた六地蔵幢には、黒漆で「迷色之師奥州住　秀鶴」と造立者とおもわれる文字が記されている。中世に千手院津金寺が隣接する東方山麓の木伐窪清水端にあったと伝承されており、石幢はその参道に建てられたとも伝えられている。昭和36年３月23日国の重要文化財に指定された。

５は、十二山城跡の隣に位置する野呂沢遺跡で、奈良～平安時代の土器の他に土師質土器が表面採集されるので、十二山城跡に関係した武士団の居住した場所ではないかと考えられる。６は、入沢城と接して南側に所在する吉祥寺遺跡で、西方に寺がある。平安時代から中世の内耳土器や陶器などが表面採集されている。

７は、馬寄・六角堂遺跡で地名の基となった六角堂が江戸時代にあったと伝承されており、元禄の銘をもつ石


採石場
884.6
863.0
採石場
三条
青沼駅
723.8
青沼小学校
青沼保育所
三条大橋
727.7
青沼会館
谷川一号橋
谷川二号橋
谷川橋
薬師堂
777.5
740.6
737.3
雇用促進住宅
吉祥寺
大宮橋
大宮諏訪神社
768.4
720.4
入沢
890.5
854.4
963.4
794
22～26
10
27
28
29
30
31
32
33
9
8
7
1
16
3
4
5
6
14
15
2
12
13
11
19
17
18
20
21
750.5
十日町
733.6
745.5
752.4
764.8
92.4
801
865.8
866.1
882.8
853.0
801.1
736.2
宿岩橋
2.3

第2図　周辺遺跡分布図

第２表　周辺遺跡一覧表

No.	名　称	所在地	立地	地目	時代					備　考
					縄文	弥生	古墳	奈良平安	中世	
1	月夜平遺跡	入沢月夜平・原	丘陵	宅地・畑	○	○	○	○	○	昭32年・平７年・９年発掘調査
2	南裏遺跡	三条浜茄子	平地	畑・宅地				○		
3	東荒谷遺跡	十日町東荒谷	平地	畑・水田・宅地	○			○		
4	十日町遺跡	十日町上長池	平地	畑・水田・宅地					○	
5	野呂沢遺跡	入沢野呂沢	山麓	畑				○	○	
6	吉祥寺遺跡	入沢諏訪の入	山麓	畑・荒地				○	○	
7	馬寄・六角堂遺跡	入沢馬寄・六角堂他	山麓	畑・果樹園	○				○	
8	藤原遺跡	入沢藤原出口	山腹	畑		○		○		
9	下海戸・山の前	入沢下海戸・上海戸他	山麓	畑・果樹園	○	○	○	○		
10	五霊西・湯殿入	入沢五霊西・湯殿入他	山麓	畑・果樹園	○	○	○	○	○	
11	権現通遺跡	入沢中権現・細久保	山麓	畑	○		○	○		
12	和田前遺跡	入沢和田前・池ノ端	山麓平地	水田・畑			○	○		
13	磯部城跡	入沢磯部	丘陵	山林					○	
14	入沢城跡	入沢	山頂	山林					○	
15	十二山城跡	入沢十二山	丘陵	山林・墓地					○	
16	月夜平４号古墳	入沢月夜平	丘陵	畑			○	○		
17	山際２号古墳	入沢上大深	山麓	畑			○	○		
18	山際３号古墳	入沢上大深	山麓	水路敷			○	○		
19	権現通５号古墳	入沢上中権現	山腹	畑			○	○		
20	権現通６号古墳	入沢上中権現	山腹	畑			○	○		
21	権現通７号古墳	入沢上遠見場	山腹	山林			○	○		
22	五霊西８号古墳	入沢上五霊西	山腹	果樹園			○	○		
23	五霊西９号古墳	入沢上五霊西	山腹	畑			○	○		
24	五霊西10号古墳	入沢上五霊西	山腹	畑			○	○		
25	五霊西11号古墳	入沢上五霊西	山腹	畑			○	○		
26	五霊西12号古墳	入沢上五霊西	山腹	畑			○	○		昭61年発掘調査、道路敷となる
27	湯殿入13号古墳	入沢上湯殿入	山麓	畑			○	○		
28	天神平14号古墳	入沢上天神平	山腹	山林			○	○		
29	天神平15号古墳	入沢上天神平	山腹	山林			○	○		
30	天神平16号古墳	入沢上天神平	山腹	山林			○	○		
31	宮林17号古墳	入沢上宮林	山腹	山林			○	○		
32	一万窪18号古墳	入沢上一万窪	山麓	畑			○	○		
33	西の窪19号古墳	入沢上西の窪	山麓	山林			○	○		

仏が並んでいる。谷川の段丘端から山麓まで南北に約50mの間隔をもった2条の土塁（どるい）と湟（ほり）あとが残っており、中世武士の私牧があったと考えられる。馬寄という地名がそれを裏付けている。また、三石延雄氏の畑から縄文時代の絵画ともいうべき貴重な土器が出土している。土器の内側に魚の姿を陰刻し、尾の下方には丸の陰刻があり、太陽・月・卵ともとれる。縄文中期後半期谷川には、さけ、ますが朔上し豊富に魚がとれたのではないだろうか。

8は、山麓台地の小範囲の部分から、弥生後期箱清水式土器、奈良～平安時代の土師器、須恵器が発見されている。

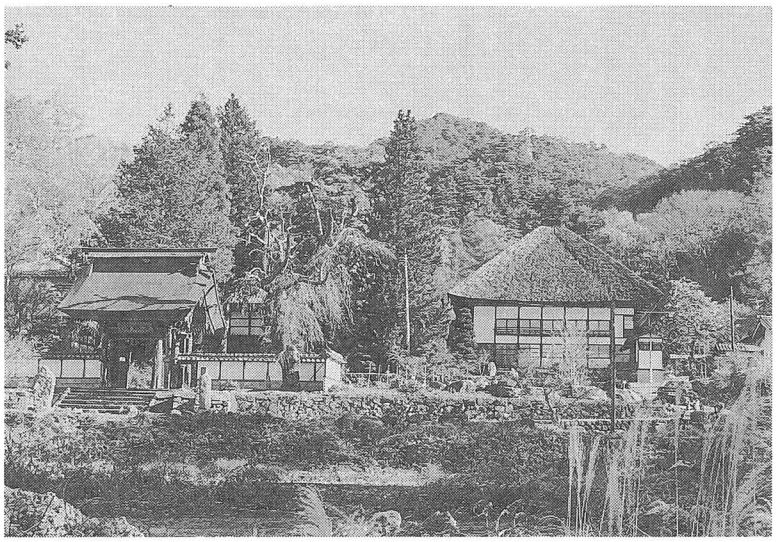
9から12までは、谷川右岸に立地している遺跡である。先ず9は、山麓台地の南面する傾斜面に細長く東面にのびている下海戸・山の前遺跡である。縄文後期・弥生後期・古墳時代～平安時代にかけての遺物が表面採集されている。

10は、古墳を6基含んだ五霊西・湯殿入遺跡で、9と同様に南面した日当りの良い立地である。縄文後期の石剣・弥生後期・古墳時代・平安時代までの複合遺跡である。とくに長田慶之助氏の畑から古墳時代鬼高式の甕、高坏・蓋・土製勾玉が出土している。

11は、古墳2基を含む権現堂遺跡である。縄文時代の石鏃と古墳時代～平安時代の土器類が出土している。また、魚を投網でとらえるとき網の端部に重りとして使用した土錘が出土している。

12は、千曲川右岸の平地が東方山麓まで続き、その東方山麓から青沼小学校の東側を南北に通じる広域農道までが遺跡の範囲である。古墳時代から平安時代の土器が出土しているが、近年この遺跡の湧水地付近から木製の鍬が出土したというから、早くから水田耕作がおこなわれていたとおもわれる。

13～15までは中世の山城である。13の磯部城跡と15の十二山城跡は、互に南北に別れて相対しており14の入沢城の砦として前戦防衛の拠点であったとおもわれる。頂上からは千曲川畔の平地が一望でき、入沢の谷の出入口部にあたる北西側の尾根上に位置した磯部城は、北方佐久平方面から侵攻してくる敵の防衛にあたり、十二山城は南方の防衛にあたったものと考えられる。応仁三年（1469）の『諏訪御符礼之古書』に、「一、五月会、入沢長助（佐久郡）、御符之礼三貫三百文、使孫六、頭役拾五貫」とあり、文明十四年（1482）壬寅御射山明年御頭、「一加頭、入沢長義、前々御符お請取被申候、当年田口民部小輔長網・入沢惣領にて候由ヲ被申、御符請取候、田口殿礼銭両度二貫三百、孫六請取候、頭役拾五貫、」と記されている。田口長網が入沢惣領と候由を申されとあるからには、入沢城主と田口氏とは密接な関係にある。田口氏は代々長秘、長網、長慶、長能と長がつく名前である。入沢氏も長助、長義と長がつく名前である。一族であった可能性が高い。


吉祥寺背後の山（右側）の尾根に露出するチャート

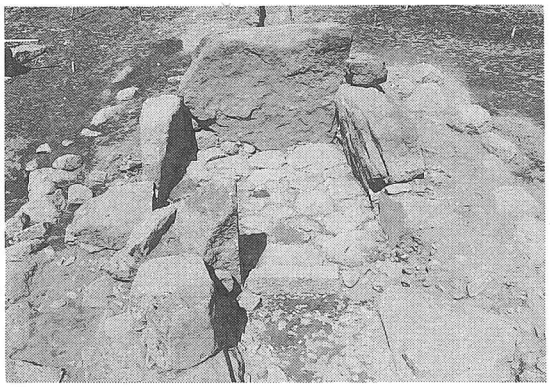
入沢氏が滅びた後は、大井庄青沼郷となり大井氏にかわったことが、天文7年（1538）大井美作沙弥源昌が八幡に寄進した鰐口が塩田の前山寺に現存していることから理解できる。それから二年後の天文9年に武田信虎に攻略された後に廃城となった。戦いのあとを示す遺物は、北東側の馬寄・六角堂遺跡から鉄鏃が発見されている。

入沢城および入沢氏については、これらの遺物や前述した信頼性の高い文

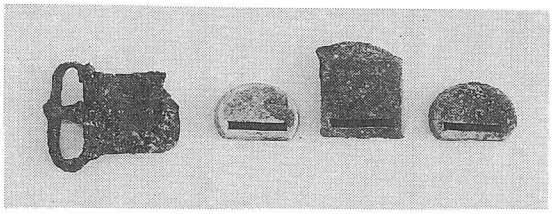
献史料により応仁三年（1469）から、天文９年（1540）までの71年間前後まで解明されているが、それ以前はわかっていない。上記の文献史料から判断して、入沢城は田口氏が築いたか、それに近い者が築き一族の者を城主に配したと考えるのが最も自然であろう。このころ諏訪神社の祭祀に参加し奉仕することは、各地の豪族にとって誇りであった。だからこそ先に示したように、「田口長網が入沢の惣領であるからと申されて、御符を請取り候、田口殿礼銭二貫三百、孫六請取候、頭役拾五貫、」とあるが、田口長網が一方的に入沢の惣領であるからといって頭役をうけた。との解釈が成り立つ。さらに、入沢氏との合意により、所用に追れて都合のつかなかった入沢氏にかわって一族である田口長網が頭役をうけたとも理解できる。

17～33までは古墳群である。地図上の範囲におさまった古墳は17基であるが、山際１号古墳のみがぬけている17と18は山際２号と３号古墳であるが、２号古墳は青沼小学校の庭へ移転復原されている。19～21は、権現通遺跡内に２基、遺跡外の北方に１基が所在する。権現通５・６・７号古墳である。

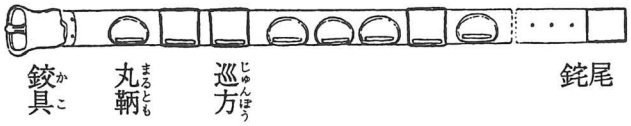
22～27は、五霊西・湯殿入遺跡内に所在する古墳で、26までが五霊西８～12号古墳、27が湯殿入13号古墳である。この内、五霊西12号古墳は昭和61年農道整備のため道路敷となり破壊されてしまうので発掘調査を実施した。入沢古墳群の構造などを知る初めての貴重な調査であった。墳丘は小さく天井石も取り去られていたが、石室内下部は盗掘もなく敷石まで完全な姿で残っていた。副葬品は奈良時代と平安時代の遺物が出土していることから平安時代になっても追葬されていたことがわかった。なかでも注目されるは、奈良時代に官人が位によって用いた銙帯具である。図に示したように、鉸具・巡方・丸鞆などの金具で飾った革帯で儀式などの時に装飾品として上着の上からつけたものである。



五霊西12号古墳の石室



出土した銙帯具



第３図　銙帯模式図

28～30までが天神平14号～16号古墳で、31は宮林17号古墳、32が一万窪18号古墳である。19の西の窪19号古墳は、入沢古墳群の中で唯一町の文化財に指定されているが、羨道部から横穴式石室まで露出している。入沢古墳群は19基を数えるが、その構造は五霊西12号古墳を除いては不明である。今後破壊されないよう整備していく必要がある。

以上のように、月夜平遺跡をとりまく周辺遺跡は非常に多い。原始時代～中世、江戸時代まで狭い谷口の扇状地や山腹、山麓に至るまで歴史は深く、いまだ解明できない謎の多い地区である。

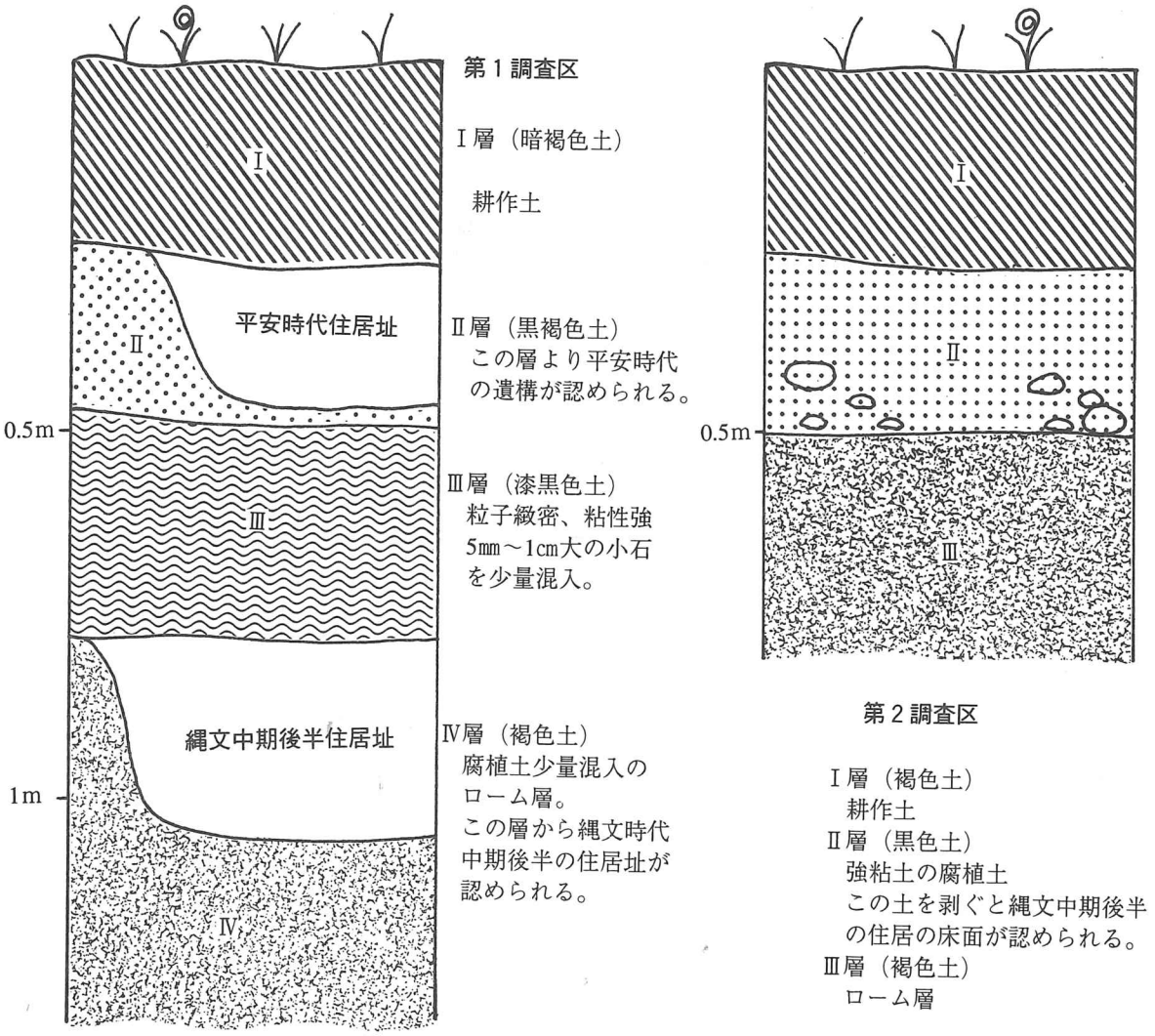
（島田　恵子）

第3章　層　　序

道路が新設された場所は、月夜平遺跡の北端部にあたり、遺跡の中心部から一段下がった段丘直下に位置している。そのため、崖があったり、平地であったりと起伏に富み、遺構が検出された地点は西側と東側では3.5mの比高差が生じている。従って第1次調査地点と第2次調査地点とでは、層序に大きなちがいがあるので地点別にそれぞれ示すことにする。

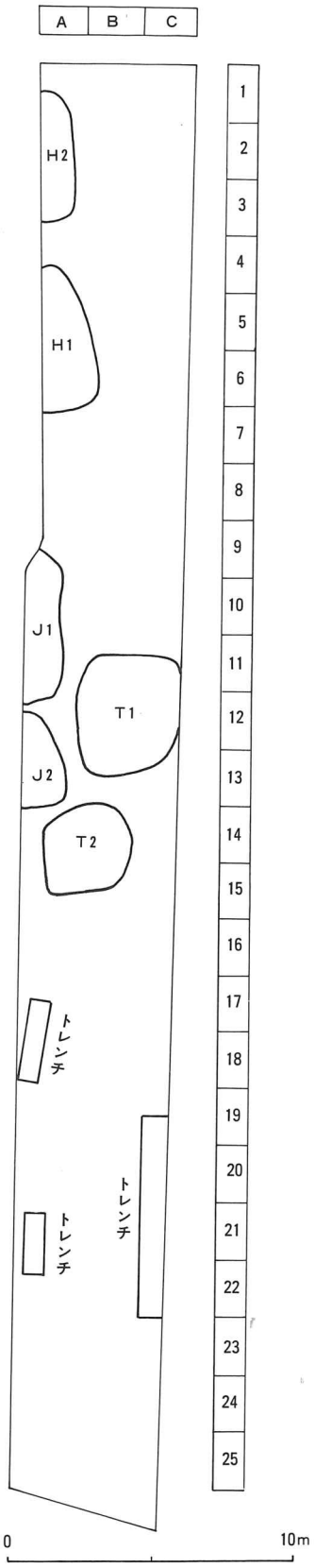
第1次調査区は、標高742mである。検出住居址の断面図で明らかなように耕作土（25～30㎝）の直下から平安時代の住居址が検出された。そこから30㎝の層があり、その下の層に縄文時代中期末期の住居址が検出された。住居址は暗褐色土に覆われていて輪郭もはっきりせず、遺物は破片が散乱し住居址は荒れているという状態であった。おそらく縄文中期後半から後期にかけて谷川の氾濫による現象ではないかとおもわれる。

第2次調査区は、浅くⅠ層は耕作土で、Ⅰ層下部とⅡ層の間から縄文後期の土器と石器が出土し、Ⅱ層下部は中期末の住居址床面で炉・埋甕などが検出された。さらに床面には南方から礫混入の土が流れ込んでいる様相を示し、ところによってはバックホーではびくともしない岩盤もあり複雑な地形である。



第4図　層序模式図

第１次調査



第５図　第１次調査区検出遺構
全体図

第２次調査

第２次調査区
（中央右の盛り上がっている草のところは岩盤）

礫散布状態とＪ３号住居址検出箇所

第4章　遺　構　と　遺　物

1　住居址

1）Ｊ１号住居址

遺　構（第６図）

Ｊ１号住居址は、平安時代の住居址が確認された地点から５ｍ東側に寄ったＣ－９～12グリッド内に検出された。調査区は新設道路の道幅４ｍという限られた区域内であるためプラン確認は非常に困難であった。

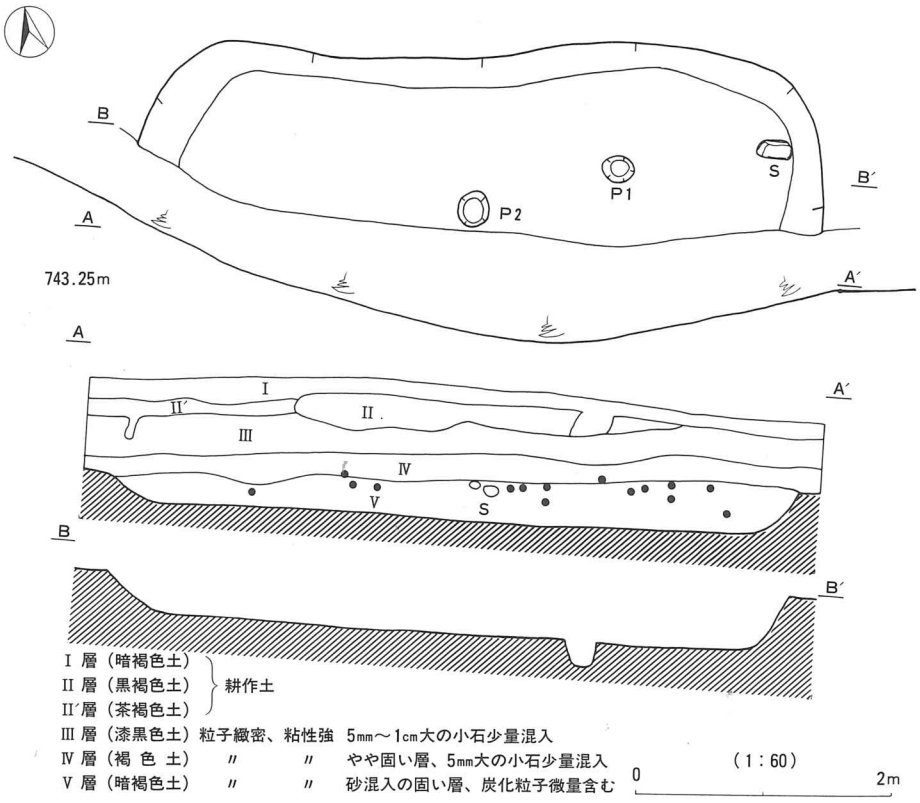
平面プランは、東西側が5.4ｍ前後であると推定できるが、南北側が1.6ｍだけの検出ではプランを推定することは難しく不安が残る。

壁高は、西側が30㎝でなだらかに立上り、東側の壁は40㎝を測り傾斜気味の立ち上りを見せている。住居址を埋めていた覆土は暗褐色土の１層で、砂を混入した固い土層だった。これは、住居址廃絶後に谷川の氾濫があったことを示していると推定される。

床面は、東側に向って２～４㎝程高くなっているがほぼ平坦である。壁に沿って床面付近まで砂の混入が多く認められた。また、床面はとくに堅緻なところはみられなかった。

柱穴は、径20㎝～25㎝、深さ20㎝のＰ$_1$と、径30㎝×24㎝、深さ24㎝のＰ$_2$が検出されたが、東側には見あたらなかった。東壁の壁下に14㎝×30㎝大の砂岩があり、床面から５㎝程上に浮いた状態にあったので、場所からみて転がりこんだ可能性がある。

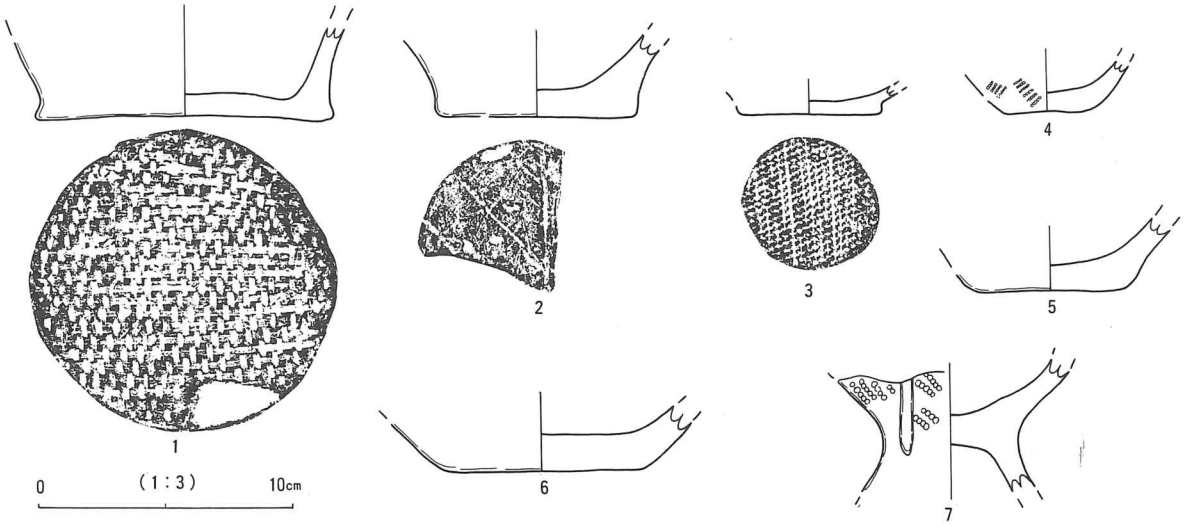
Ｊ１号住居址は、道路予定地南寄りの端に検出したことと、確認面の土層と住居址覆土との区別がつきにくく、それに加えて床面が張り床のように固くなく、あやふやな固さであったため精査をなん度も繰り返してようやく仕上がった。



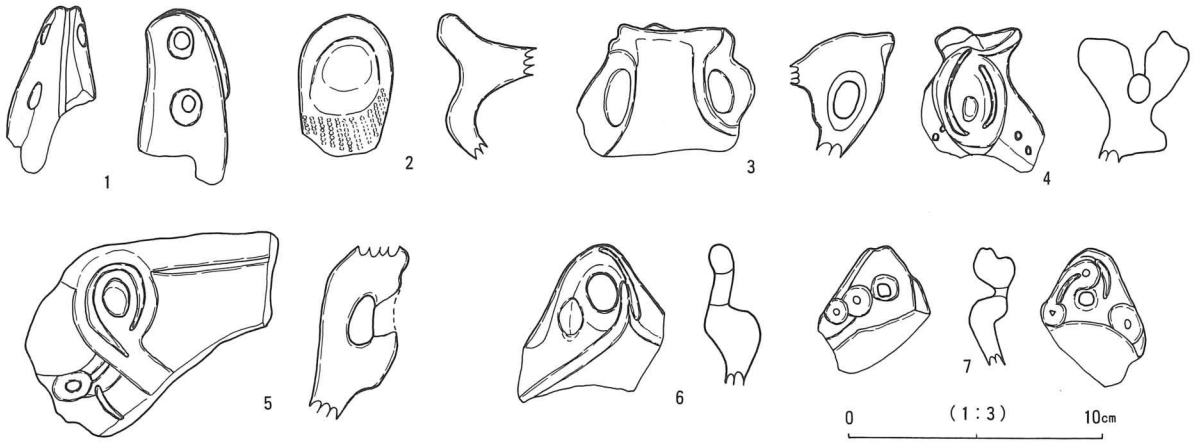
第６図　Ｊ１号住居址実測図

遺　物（第７～10図）

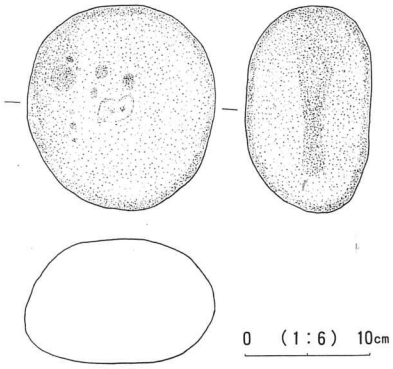
出土した土器は、角の摩滅した５㎝大の無文片と、１㎝～４㎝大の細片が約1,000点近く出土した。ようやく実測できた底部片と、把手部分、口縁部から胴部にかけて文様のある土器片を拓影図に示した。住居址断面図に•印で出土状態を示したのは、第７図底部片と第８図把手部分である。



第7図　Ｊ１号住居址出土土器実測図



第８図　Ｊ１号住居址出土把手実測図



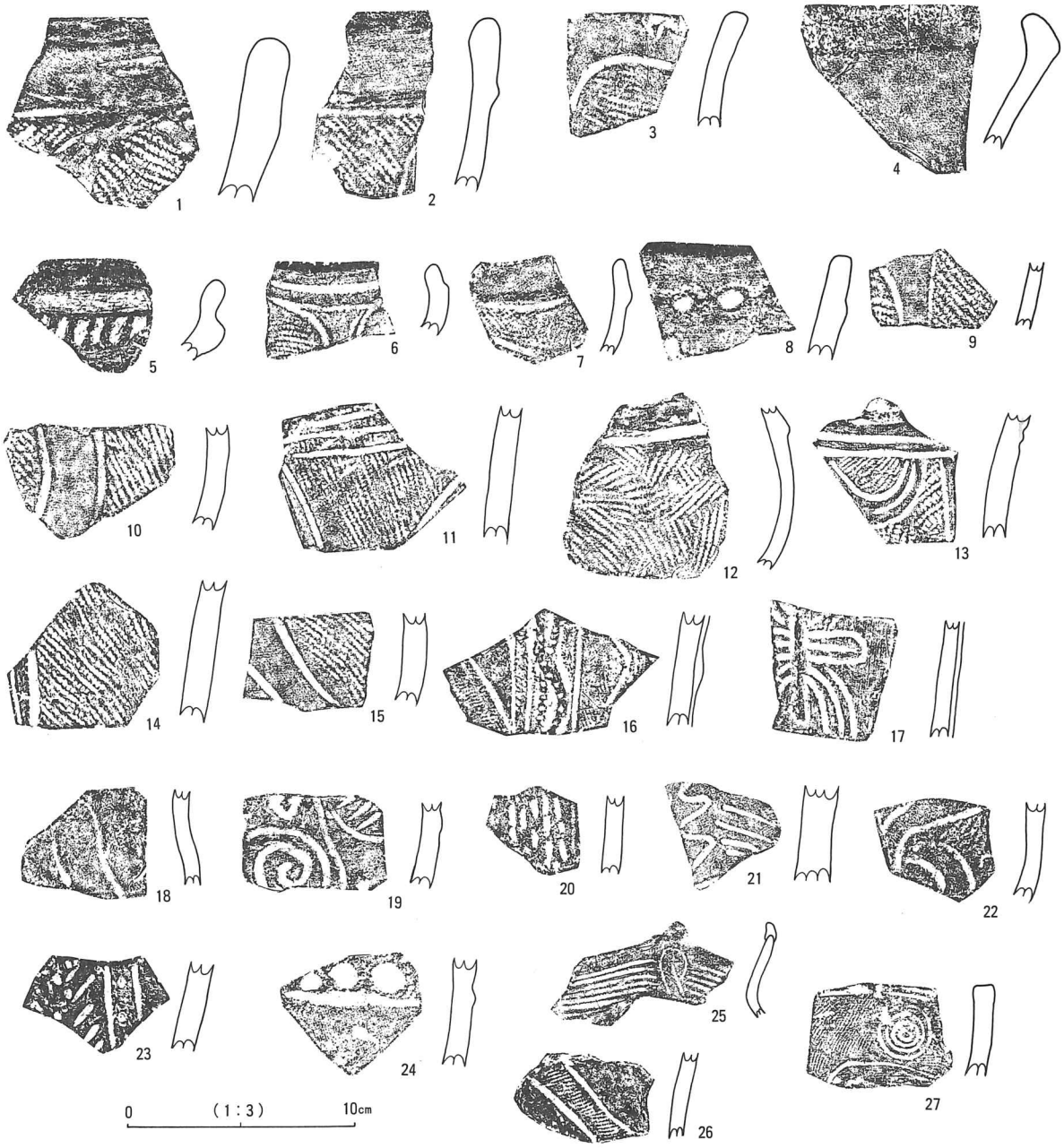
第９図　Ｊ１号住居址出土土器実測図

底部片１・３は網代圧痕で、両方とも交互に２本越えと１本潜り、１本送りを繰り返した網代編みである。２は、木葉痕である。葉脈の間隔が広いことからかなり大きな葉を用いている。トチの葉かホウの葉であろう。

３は器厚が薄く、黒味を帯びた焼成であることから注口土器であるとおもわれる。４～６もそれぞれ大小異なる底部片で、７は台付鉢の破片である。文様は縄文と隆線の懸垂文が見られる。

第８図はＪ１号住居址から出土した土器の把手をあつめた。１は左右に二つの孔をつけ中心部は沈線で区分している。２は、下部に縄文を施した耳状、３と５は橋状の把手である。４は頂部と表面に楕円形を配し、沈線で縁をとり、中心部は円形の凹みがある。

６と７は、山形の口縁部を飾った縄文後期の把手で黒味を帯びた焼成である。これらの出土地点と高さを断面図（第６図）に示したが、比較的高い位置から出土している。また、縄文中期末～後期初頭の土器片が混入して出土していることを考えると、後期になんらかの自然災害がおこったこと



第10図　Ｊ１号住居址出土土器拓影図

が考えられる。

第９図は、幅15～16㎝を測る磨石・敲石である。正面に凹みが生じ、磨れてすべすべしている。手に持つには重すぎて両手を使わなければならないので、これを台石にして堅果類などを割ったため、使用痕の凹みが残ったのではないだろうか。

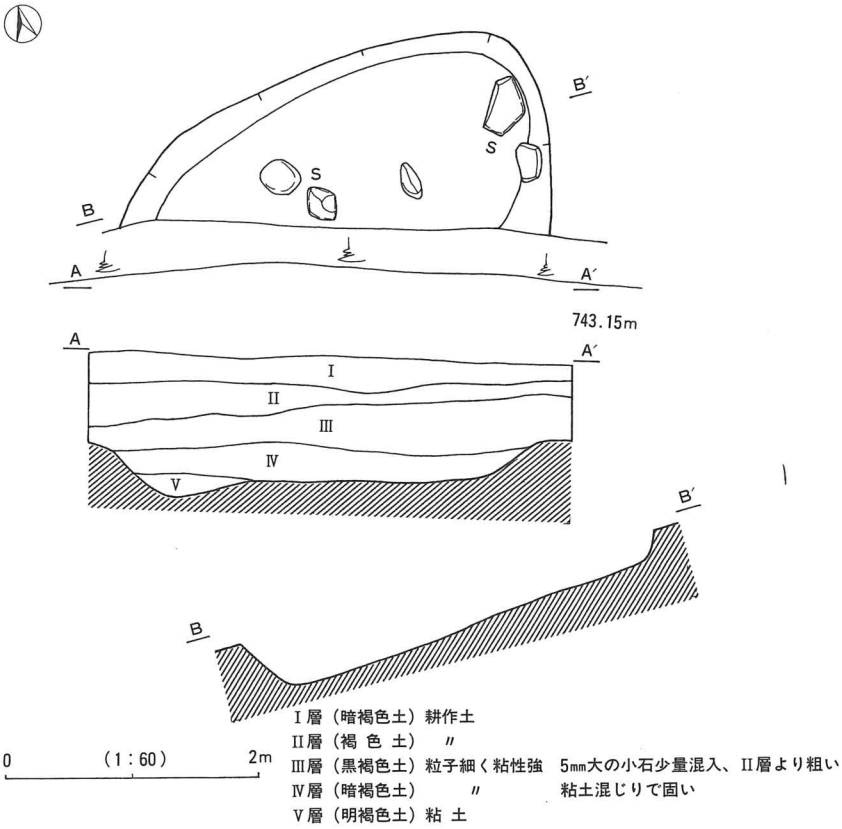
第10図は、土器片の拓影図である。出土した土器は全て破片でその内拓影が可能なものは図に示した26点程である。これらの土器片は、地文が縄文、沈線で区画、懸垂文を施したものが多い。全体の文様が関東の加曽利Ｅ式に類似している。20と23は、曽利系の雨垂状や綾杉沈線文に類似はしているが、細かく観察するといくらか異なっている。曽利系にも縄文はみられるがどの個体にもあるほど顕著ではない。８と24は隆帯に指頭を押圧したもので、口縁部直下を隆帯が巡り、胴部は無文の可能性があるが破片なので不明である。後期初頭の粗製土器に位置付けられる。23～27は、後期初頭の土器片で器厚が薄く器面も研磨されている。17の文様は珍らしくあまり

目にしないものであり、全体がわからないので残念である。器面は両面がきれいなので後期の破片かもしれない。

以上がＪ１号住居址出土の遺物であるが、本住居址は中期末に比定されよう。しかし、後期の土器が混在しており中期の住居址廃絶後、後期に入って水害があったのではないだろうか。1,000点以上にものぼる土器の破片はすべて摩滅していたことにも裏付けられよう。

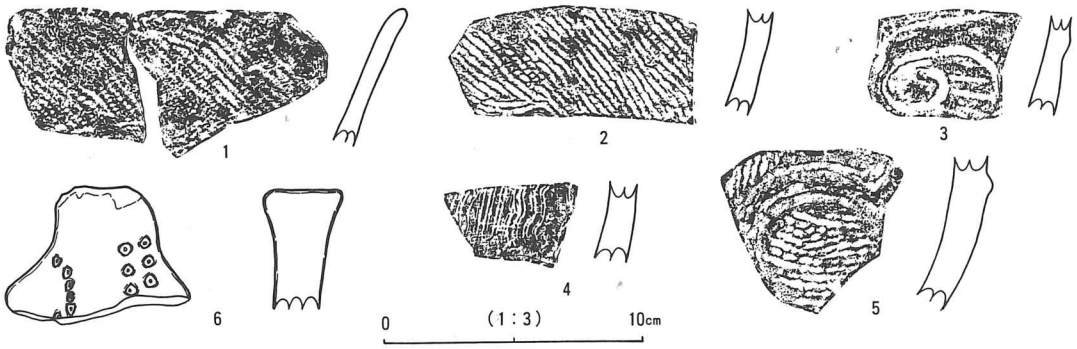
２）Ｊ２号住居址（第11図）

本住居址はＪ１号住居址の東側に隣接して検出された。調査区内には住居の３分の１程かかったのみで全容がつかめないため、平面プランなどは不明である。Ｊ１号住居址と比較すると小形で東西側は一辺3.5ｍ程であるから、約1.5ｍばかり小形化する。壁高は約25㎝～40㎝とバラついているが、これは、西側が深く東側にいくにしたがって高くなるからである。断面図で層位をみると、Ｖ層は粘土層のかたまりである。このようにＪ１号住居址と隣接していながら層位に大きな変化がみられるので、段丘下のこの場所は石垣の取り付け工事、また、地層的に変化の多い地点である。耕作土下の層は黒褐色を呈し住居址の覆土よりも黒色の強い腐植土であることから、Ｊ２号住居址を築いた後の時代にこの地が氾濫原であったことを物語っているといえる。



第11図　Ｊ２号住居址実測図

住居址を覆っている土層は、暗褐色を呈し粘土が混入している固い土であった。なお、西側の壁直下に粘土の塊まりがみられた場所は調査区ギリギリ



第12図　Ｊ２号住居址出土土器拓影図

のところなので掘り下げには至らなかったので詳細は不明である。

住居址内の床面直上には、20～40㎝大の溶結凝灰岩が５点散乱していたが流れこんだ可能性がある。柱穴は検出されなかったので住居跡であるかは疑問である。しかし、床面直上に土器片が出土している。

遺　物（第12図）

遺物は土器片が20点程出土している。その内の床面直上のものを第12図に示した。土器片はＪ１号住居址のようにおびただしく出土しなかったので、住居址と断定するには不安が残る。

１・２・５は地文に縄文を施し、５は隆線で区画されている。３は渦巻文が凹線と隆線の組合せで施文されている。４の櫛描き細線文は加曽利ＥⅣ式期に見られ、県内にはきわめて少ない。

６の把手に施文されている小さい刺突は、加曽利Ｅ期に多く使われ曽利式にはみられない。

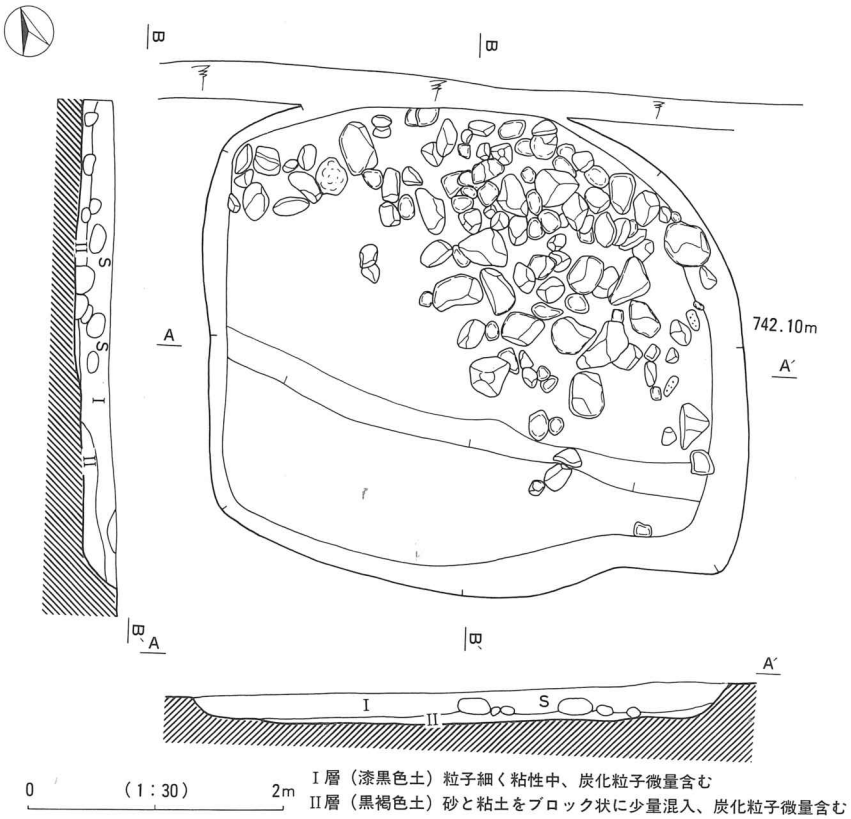
以上の遺物から判断して本遺構は、中期末に比定されよう。

３）Ｔ１号特殊遺構（第13図～18図）

Ｔ１号特殊遺構は、Ｊ１号・Ｊ２号住居址の北方の間より隣接して検出された。一帯は黒色土や漆黒色土の落込みが全体を覆っており、プラン確認の際はＪ１号・Ｊ２号住居址、Ｔ１号・Ｔ２号特殊遺構とそれぞれが隣接していたため輪郭がつかめず困難をきたした。

平面プランは、東西側4.2ｍ、南北側3.6ｍを測り、北側が一部区域外のため検出できなかったが、不整な方形を呈す。

壁高は、最深部を測る北東コーナー付近が40㎝で、北西コーナー付近は20㎝と浅い。また、南壁中央は25㎝で南東コーナーの壁高は28㎝、南西コーナー側は10㎝で浅くなる。南壁が浅いのは、遺構の南側から50㎝～１ｍ離れた部分に段が生じ、一段上がっているからである。

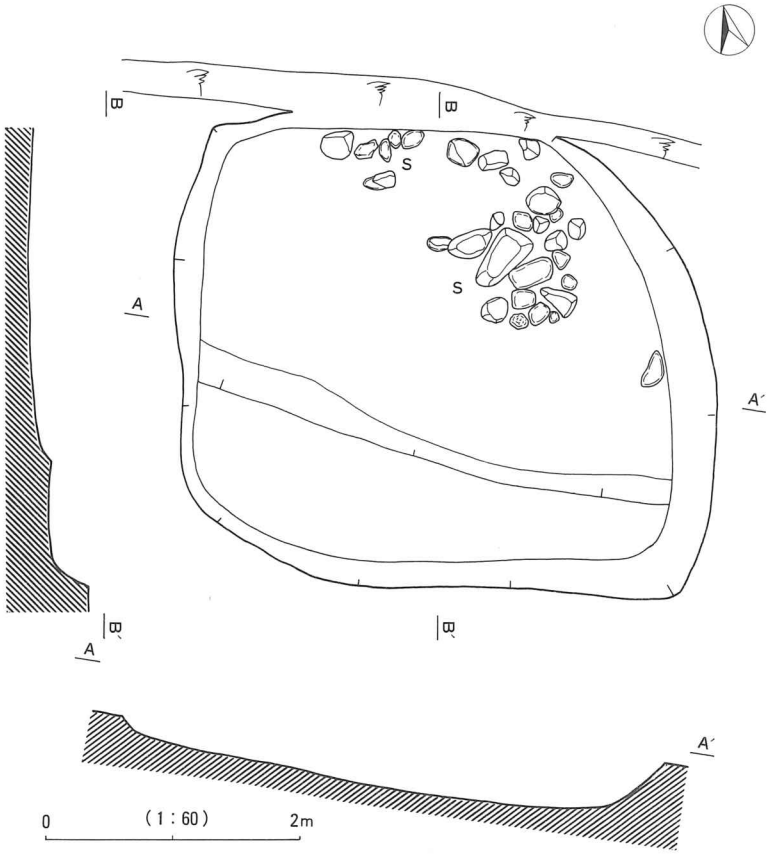


第13図　Ｔ１号特殊遺構実測図

覆土は２層から成り、Ⅰ層は漆黒色土、Ⅱ層は黒褐色で砂と粘土をブロック状に少量混入し、Ⅰ・Ⅱ層共に炭化粒子を微量含んでいる。

床面は、一段上がった南壁側は固く、礫が集中している部分の床面はやや固いが南壁側ほどではない。柱穴、炉は検出されなかった。

Ｔ１号特殊遺構は、10㎝～40㎝大の溶結凝灰岩、安山岩、砂岩、流紋岩などの石質の礫が遺



第14図　Ｔ１号特殊遺構実測図№２

構の約半分を埋める状態で北東側に集中して出土した。人為的に集石したように見受けられるためＴ１号特殊遺構としたが限られた区域の調査なので、全体をみなければ判断はつきにくい。

左の図は集石を取り除いたあとに、もう一段重なっていた集石を図面化したものである。床面と壁は固く、しっかりした状態であった。

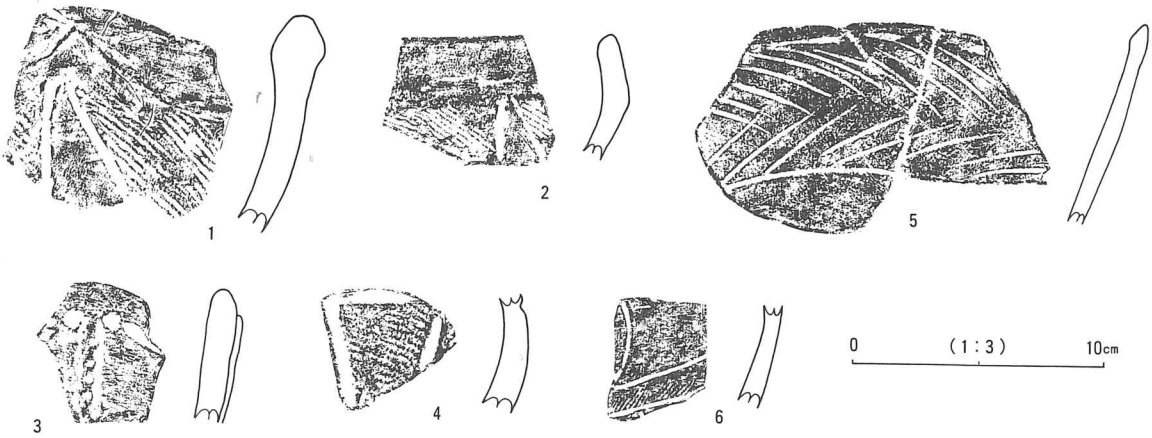
遺　物（第15～18図）

遺物は集石の上部から、土師器・緑釉陶器片などがあり、集石の中から縄文中期末～後期の土器片が主に出土した。

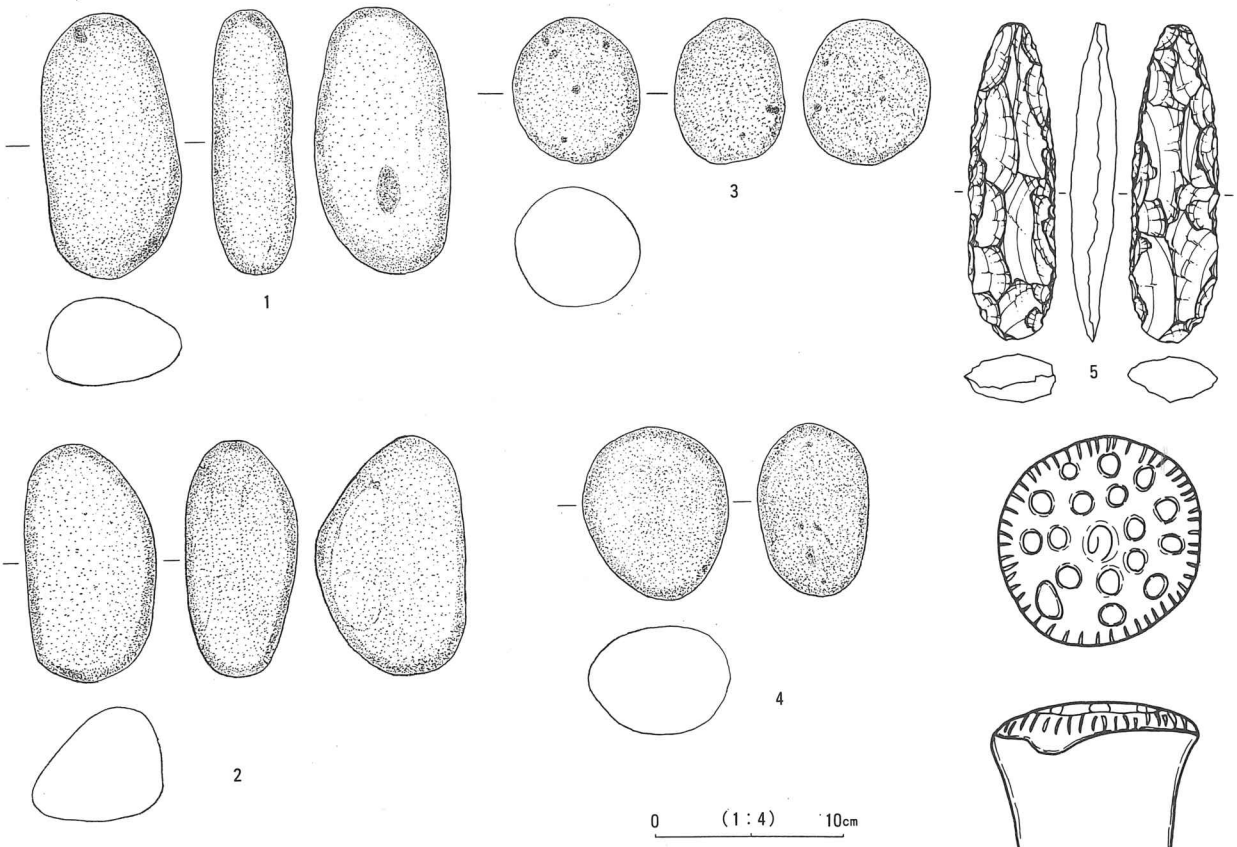
土師器200点、弥生後期の赤く塗彩された土器片２点、縄文中期末の土器片450点、後期と判別されるもの50点が出土した。中期末450点のうち、無文土器、文様が末端に少し認められるものなどが大半を占めており、拓本可能なものは少ない。

第15図１～４は、縄文中期末の加曽利ＥⅣ式期の深鉢の口縁部と胴部の破片である。５は、口縁部直下に羽状の沈線文を施した深鉢で、縄文後期加曽利ＢⅡ式に併行する。出土は南東コーナーに近い東壁側に出土した。６は表面のみ磨かれ、細かい縄目で施文した後期の土器片である。

第16図は石器を図示した。１はやや扁平な自然石の安山岩を用いている。上面は中央が磨られ、一方は全体に磨られ敲打痕が１箇所ある。２は、閃緑岩で断面が三角に近い形状で、一角の側面と左右の面が磨られている。３は、卵を大きくしたような形状で全体が磨られている。閃緑岩の自然石を用いている。４は、安山岩で手の中



第15図　Ｔ１号特殊遺構出土土器拓影図



第16図　Ｔ１号特殊遺構出土石器実測図

第17図　Ｔ１号特殊遺構出土土製耳飾り実測図

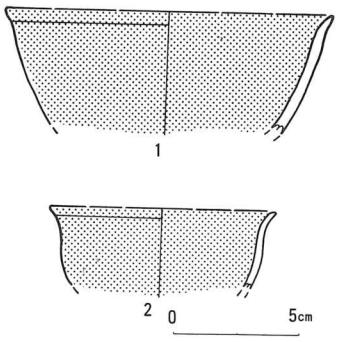
に入る大きさで一面のみ磨られているのであまり使用していないとおもわれる。

５は石鍬である。長身で細い身をもつことから、固い土を深く耕すために用いられたと考えられる。一帯は粘性が強い土なのでこうした工夫がされたのだろうか。安山岩を素材としている。

また、第17図に見られるように、土製の耳飾りが出土した。周縁をこまかい刻目でふち取り、内側に竹の棒の先で押圧して丸い円形文様を二周り描き、中心部に「の」字形を入れている。縄文後期の耳飾りであろう。

Ｔ１号特殊遺構は、さまざまな時代の遺物が出土している。第18図は緑釉陶器の破片である。集石の上部から出土しているので流れ込んだものとおもわれるが、緑釉陶器の出土は初見であり、この入沢の地に東海地方の緑釉陶器を使う程の地位の高い人物が実在したことを物語っているといえよう。

本特殊遺構は、縄文中期末に構築され、たび重なる谷川の氾濫でさまざまな時代の遺物が流れ込んだと判断される。

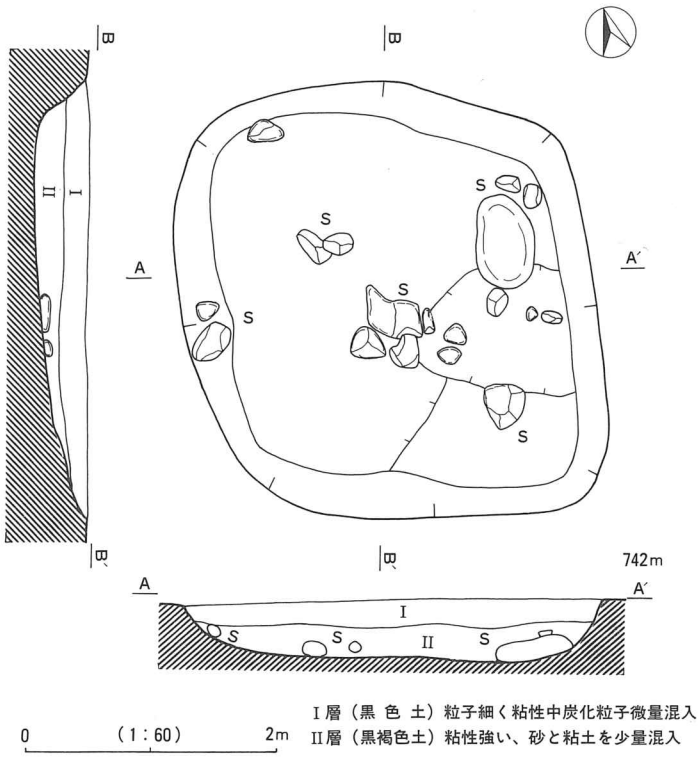


第18図　Ｔ１号特殊遺構出土緑釉陶器実測図

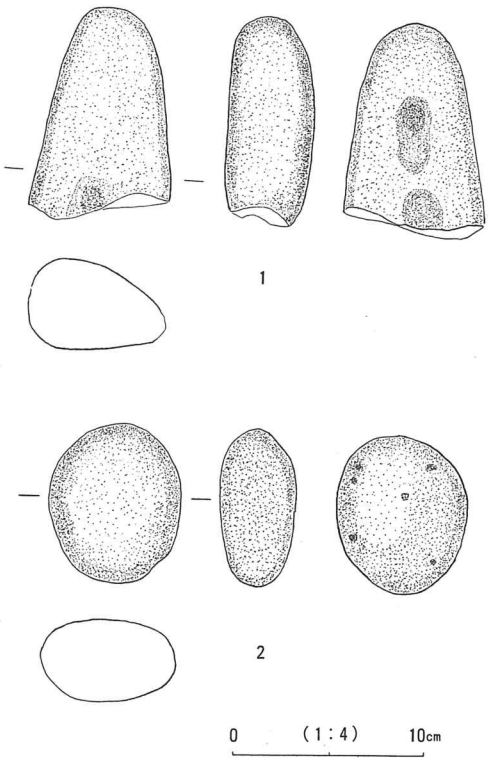
４）Ｔ２号特殊遺構（第19図）

Ｔ２号特殊遺構は、Ｊ２号住居址、Ｔ１号特殊遺構の東方に隣接して検出された。確認面の黒色土は本遺構で切れて褐色土となるので、これを限り東方には遺構は存在しなかった。

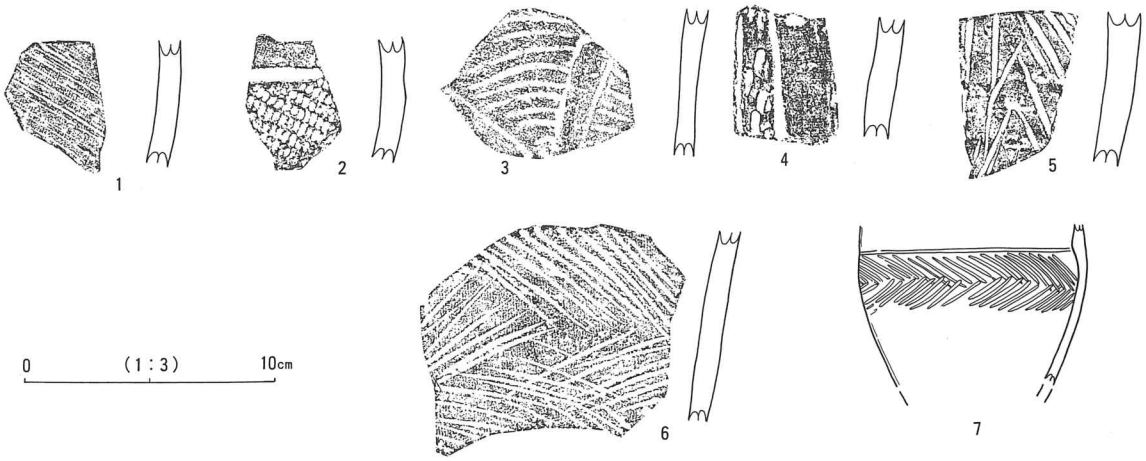
平面プランは、東西側3.3ｍ・南北側3.5ｍを測り、方形のプランとなる。壁高は、北壁40㎝、東壁35㎝、西壁



第19図　T２号特殊遺構実測図



第21図　T２号特殊遺構出土石器実測図



第20図　T２号特殊遺構出土土器拓影・実測図

10㎝で四方それぞれ高さが異なる。床面は東西側はほぼ平坦であるが、南側がやや浅くなる。地形的に南から北に向って傾斜している関係からだろうか。

覆土は２層から成り、Ⅰ層が黒色土で炭化粒子を微量含む。Ⅱ層は黒褐色を呈し、粘性が強く、砂と粘土を少量混入している。

柱穴は検出されなかった。北東コーナー寄りに最大横幅45㎝、縦幅75㎝の大きな石が床面にへばり付く状態に残っていた。石のある上部や周囲は黒色なので掘りすぎたのかもしれない。遺構図面に示したその他の石は、浮いた状態にあったので流れ込んだと考えられる。本構は全容がわかる道路予定地の中心に存在したこともあり、４辺の壁がしっかりした立ち上がり状態を示していたことから、T２号特殊遺構と命名した。本来は小竪穴と定めるべきかもしれない。

遺　物（第20・21図）

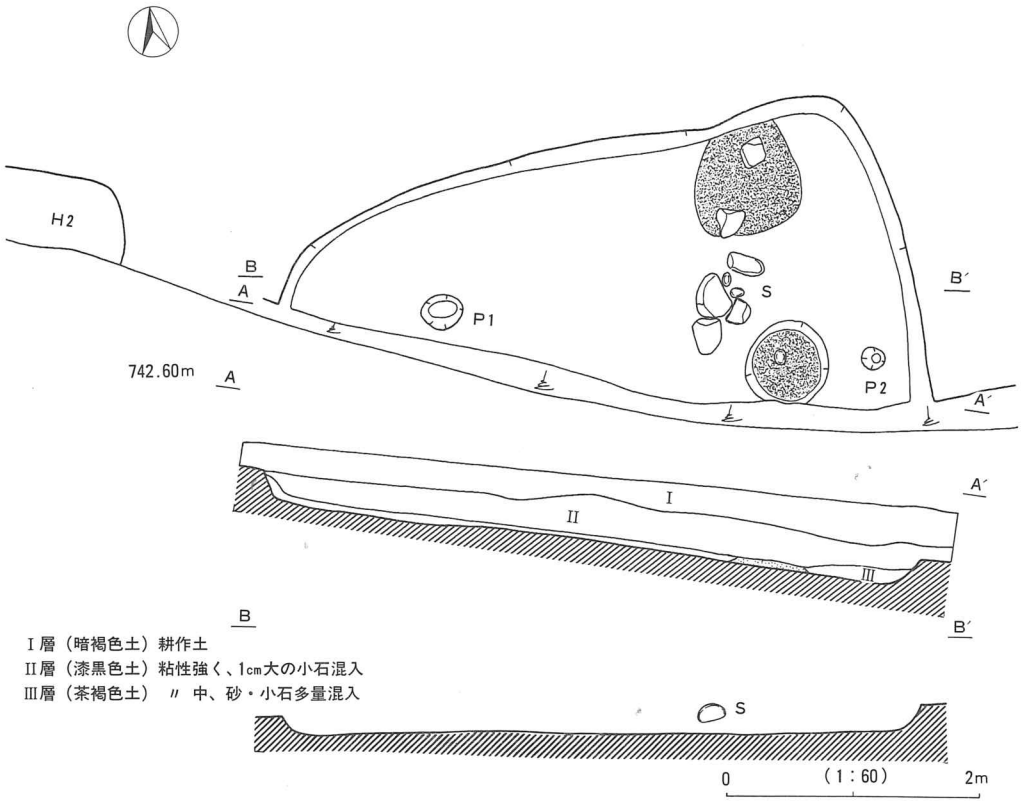
Ｔ２号特殊遺構の掘り下げをはじめて間もなく、図示した７の土器が覆土上部から出土しはじめたので現場は活気づいたがその周囲から６の破片が出たのみであった。覆土中からは中後半期の角の丸い破片が110点程出土した。１～５は中期末期の土器で、１は櫛状工具により細沈線が施され、２は縄文、３は隆帯の区画に沈線文、４は雨垂状沈線文、５は綾杉状沈線文が施文されている。６・７は羽状の沈線文を施文したもので、それぞれ別固体である。６は７より一まわり大きく、７は、口縁部と底部を欠失するが器高は20㎝前後で、口縁が開く器形となろう。内側は黒色で両面ともに器肌は磨かれている。縄文後期中葉の加曽利Ｂ式に併行する土器である。

第21図１は磨石・敲石である。断面の右側が薄く、左側が厚く、座りの良い自然な状態の部分を正面とした。正面は中央に敲打痕があり、先端部と左側面近くが磨られている。断面は厚い方の左側面が磨られ、裏面は二つの敲打痕がある。砂岩を素材にしており、下の部分が割れている。主に敲石として堅果類を割った凹みであろう。２は、やや扁平で手の中に入る大きさの輝石安山岩を用いている。正面は中央が磨られ、裏面は左側の上端部付近が磨られている。

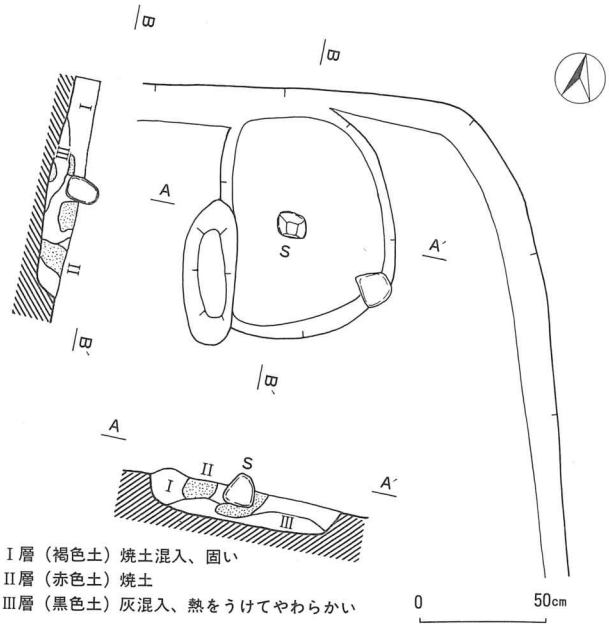
本遺構は、Ｔ１号と同様の縄文中期末に構築されたと判断した。

Ｈ１号住居址（第22～24図）

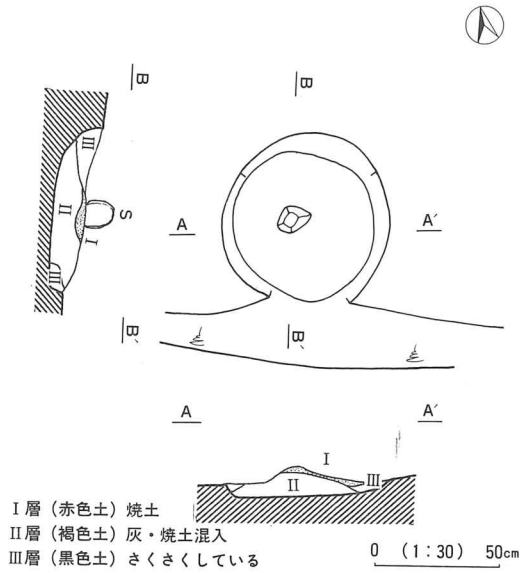
本住居址は、暗褐色土の耕作土を25㎝程剥ぐと住居の部分のみ漆黒色土で覆われており、すぐに住居址の存在が明らかになったが、１号・２号共に住居址は３分の１・４分の１ほど調査区にかかっているのみで詳細はわからない。したがって平面プランは北壁側の一辺が4.8ｍを測ると推定されるので、５ｍ前後の方形を呈する住居址となろう。



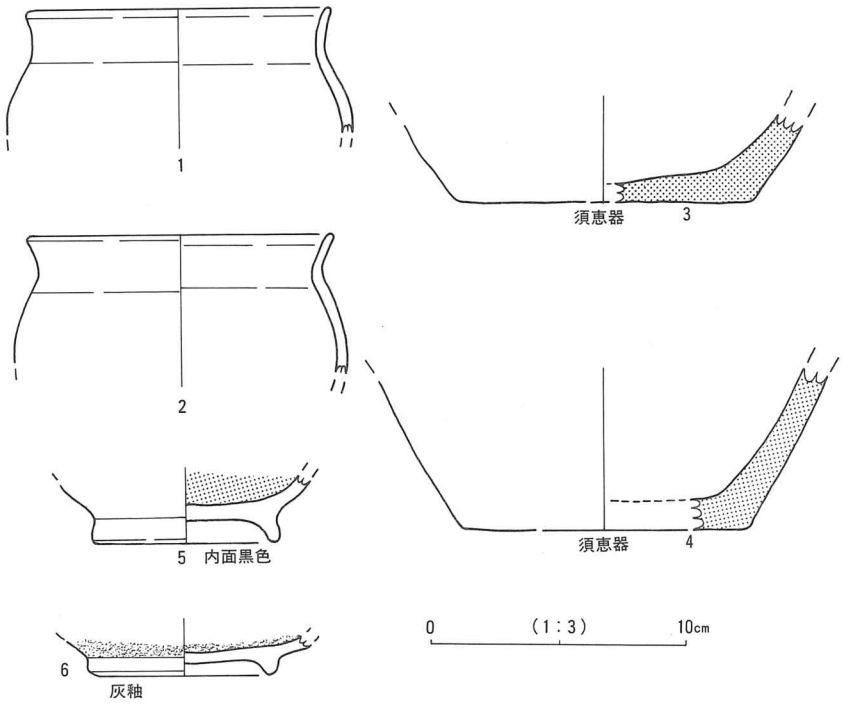
第22図　Ｈ１号住居址実測図



第23図　Ｈ１号住居址カマド実測図



第24図　Ｈ１号住居址灰溜実測図



第25図　Ｈ１号住居址出土土器実測図

住居址覆土は、漆黒色土と茶褐色土の２層により形成され、共に１㎝大の小石を混入し、下部の茶褐色土は砂を混入しているので、サクサクしている。

壁高は、15㎝から20㎝を測り、壁は傾斜気味に立ち上がっている。

床面は、平坦であったがそれほど固くはない。柱穴とおもわれる穴が２つ検出された。西北コーナーから１ｍ離れた地点に、36㎝×28㎝、深さ30㎝のP_1と、東壁寄りに径20㎝、深さ20㎝を測るP_2である。

東側に寄った北壁にカマドが設けられていたが、石組が取り去られて焚き口から１ｍ範囲内に散乱していた。石組粘土カマドで左脇の粘土のみ、長さ55㎝、幅20㎝が残っており、焚口の中央に赤く焼けた支脚石が７㎝程埋め込まれた状態で残っていた。焼土は支脚石を中心にまだらに堆積している。

カマドから1.2ｍ離れた地点に、径1.2ｍを測る円形の施設がみられた。灰と焼土が混入しており、中心部に赤く焼けた石があることから、当初カマドが二つあるとおもったが、位置的な面とカマドの構造からこのような場所に設置されないことから、周囲を精査すると灰が散乱していることから灰溜の施設であることが分かった。

以上が住居址の全容であるが、３分の１の検出であったがカマドと灰溜施設の残っていた部分が調査できて幸

いであった。

遺　物（第25図）

本住居址はカマドから灰溜施設にかけて、土師・須恵・灰釉陶器の破片が集中して出土した。器種は、小形甕、須恵器壷、土師・灰釉の埦である。覆土中からは185点の土師器甕・坏の破片が出土した。

第25図１・２はロクロで調整された土師器小形甕の破片であるが、回転実測で口径を推測すると約12cmである。１の口縁部は直立するが、２は「く」の字状となる。器厚は薄く、赤褐色を呈す。

３・４は須恵器の底部片である。実測で底部を推定すると３が11.8cm、４が11.3cmで３がわずかに底径が広く、器厚がうすい。内面の調整を比較すると３は４より乱雑で、表面は共に平行叩目文がある。

５は、土師器埦の底部である。内面黒色で乱雑な十字の暗文がある。６は灰釉陶器の底部で、釉は内面の底部にまだらに施釉されているが、表面の底部は釉はみられない。

以上の遺物から本住居址は、平安時代後半期に比定されよう。

Ｈ２号住居址（第26図）

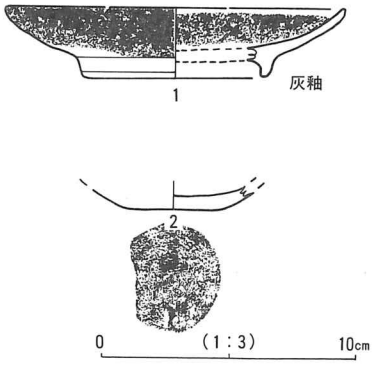
本住居址は、Ｈ１号住居址と60cmの間隔をおくだけという隣接状況で検出された。Ｈ１号と同様に耕作土を削平した直下に漆黒色の落ち込みがあり容易に検出することができた。しかし、住居址全体の４分の１のみが調査区内にとどまっただけであった。平面プランは北側が一辺3.2ｍを測り、これから推定して３ｍ内外の小形住居址であろう。覆土上部は漆黒色土に覆われ、下部は褐色土で小石が多量混入する埋土である。

北東コーナーから30cmほど東側に寄った地点に幅40cmにわたり焼土が堆積していた。カマドのあとであろうとおもわれるが、北壁から床面50cm～35cmの幅だけの検出では速断は出来ない。

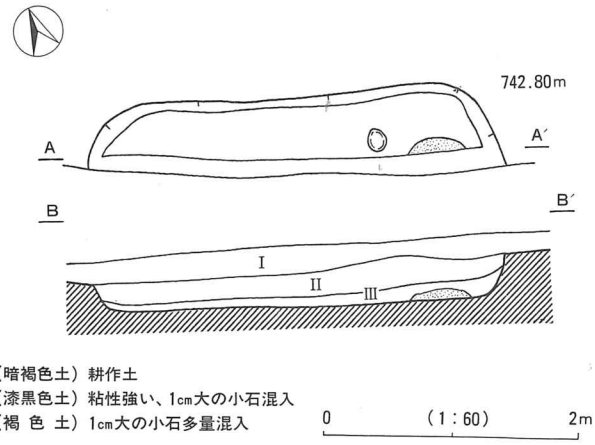
壁高は20cmで傾斜して立ち上がる。床面は軟弱であった。

遺　物（第27・28図）

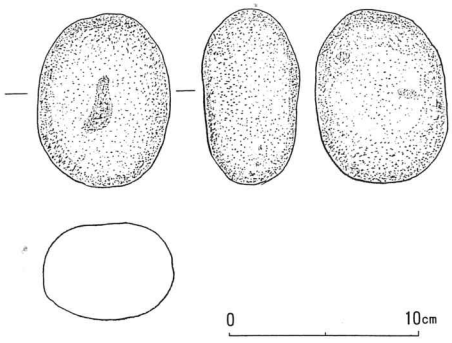
遺物は、覆土中より30点の土師器坏・甕・羽釜の破片が出土した。そのうち縄文土器の細片がＨ１号住居址にはなかったが、本址に限り３点混入



第27図　Ｈ２号住居址出土土器実測図



第26図　Ｈ2号住居址実測



第28図　Ｈ２号住居址出土石器実測図

していた。図示した灰釉陶器・土師器坏底部は床面直上からの出土である。第27図１は灰釉陶器の皿で高台は先端を尖らせている。釉は内外面共に底面近くまで施釉されている。２は小形坏の底部片で径４㎝を測る。

磨石は、輝石安山岩で中央のみ磨られた痕跡がある。敲石として使用した凹みのあとが、側面の上下にも残っている。縄文時代に残っていたものがまぎれこんだのか、再利用も考えられる。

本住居址は、Ｈ１号住居址と同様の平安時代後半期に比定されよう。

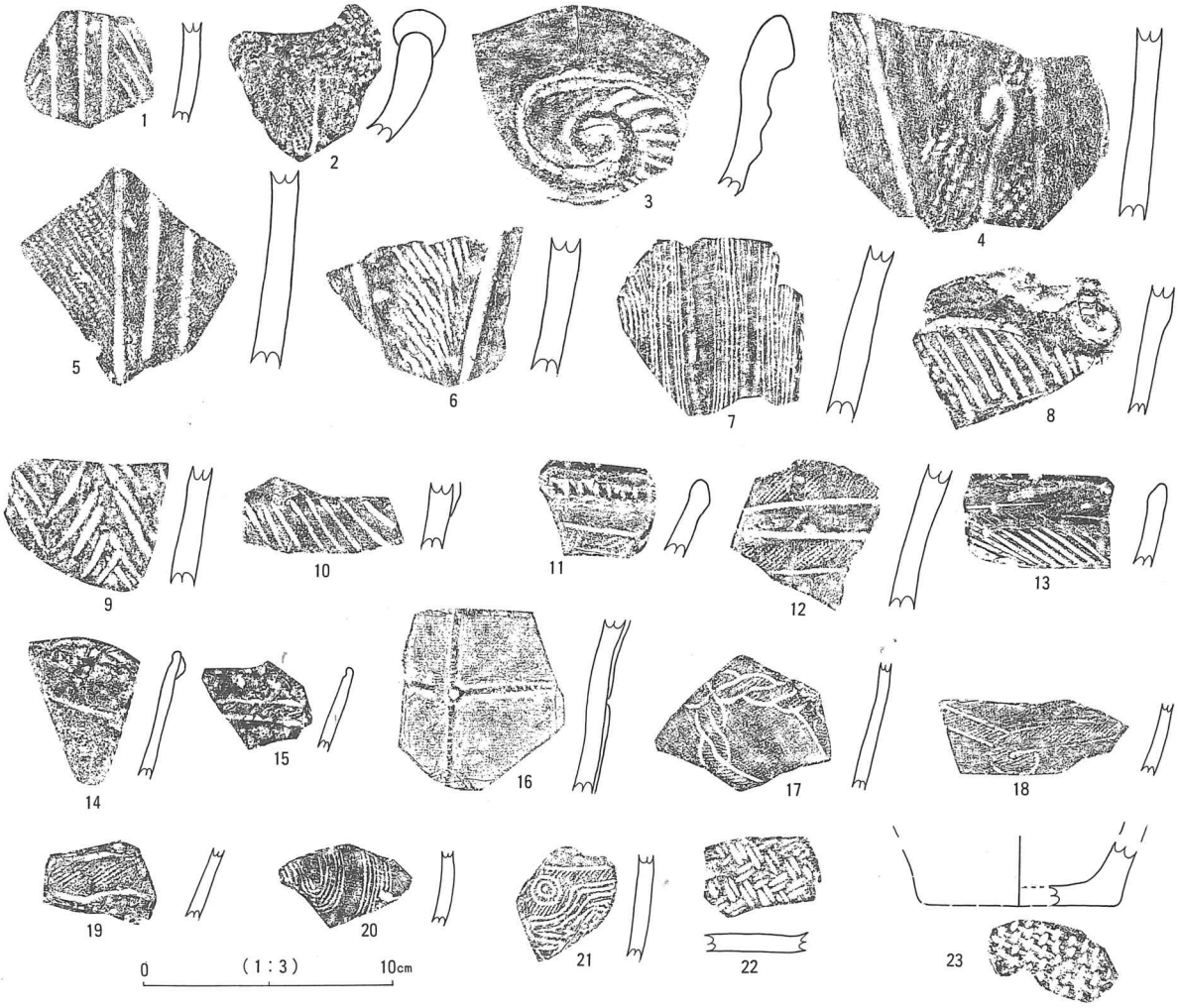
７）トレンチ出土の土器（第29図）

第１次調査のＢ・Ｃ－９～25までのトレンチ、さらに深掘りトレンチ内から出土した土器を一括して、第29図拓影図に示した。縄文中期末と後期の土器が混在して出土し、その内、１～10までが中期末の土器である。

沈線による懸垂文・綾杉文・蕨手文・条線文などがあり、その他、隆帯の渦巻文・区画内の斜めの沈線文などがある。特に蕨手文に縄文が施されているのは、加曽利Ｅの影響が強い。

11～23までが後期の土器片である。器厚が薄くなり、表・裏面共に少し磨きがあるものが増えてくる。縄文の網目が細くなるのも特徴である。17～21は特に加曽利Ｂ$_1$式に併行する。

底部に網代圧痕のある破片は22・23である。22は、２本越え、２本潜り、１本送りの網代痕でこれは初見であるが、23は、２本越え、１本潜り、１本送りで、Ｊ１号住居址からも出土している。



第29図　トレンチ出土土器拓影図

第 2 次 調 査

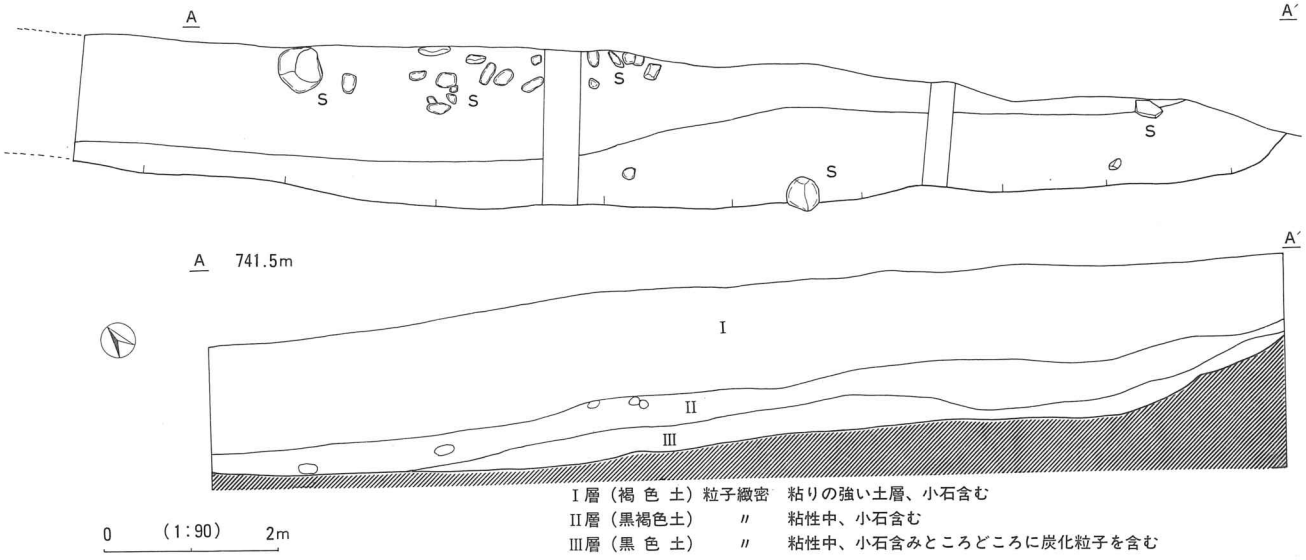
8）溝状遺構（第30図）

平成九年度の第２次調査は、延長50ｍが調査対象区であった。その内の14ｍに溝の端が確認された。下に示した図が溝であるが道路幅のみの調査のため、残念ながら全容は推定にとどまざるを得ない。

溝は、東端の深さが70㎝、西端で45㎝と一定していない。丁度調査区が段差のある土堤にかかっているため、東端と西端では25㎝の差が生じている。検出部分の溝の最大幅は180㎝である。これから判断しても３ｍ～４ｍにはなるだろう。

表土および耕作土は褐色を呈し、層厚70㎝から120㎝を測る。雑草や耕作によって生じる腐植土の色の変化はあまりみられなかった。溝覆土はⅡ層とⅢ層で、上部Ⅱ層は黒褐色を呈し、小石を混入していた。下部のⅢ層は黒褐色土でところどころに炭化粒子を含む。

溝の水ぎわとなる南側の立ち上りはゆるやかであり、５㎝～10㎝大の石が土に張り付くような状態で顔を出していた。溝中央の礫は、そのほとんどがⅡ層中の上部にあることから、溝が埋まっていく最終の時点で転がりこんだとおもわれる。溝の底には石や砂はなかったので、水が流れていたのは短期間であって、その後は、湿地帯となり葦や水草などの雑草が繁茂して腐植土化したものと考えられる。

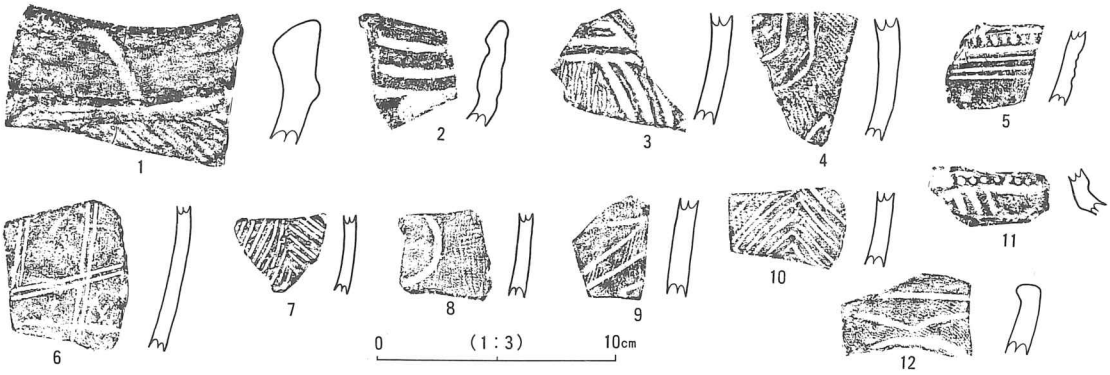


第30図　溝状遺構実測図

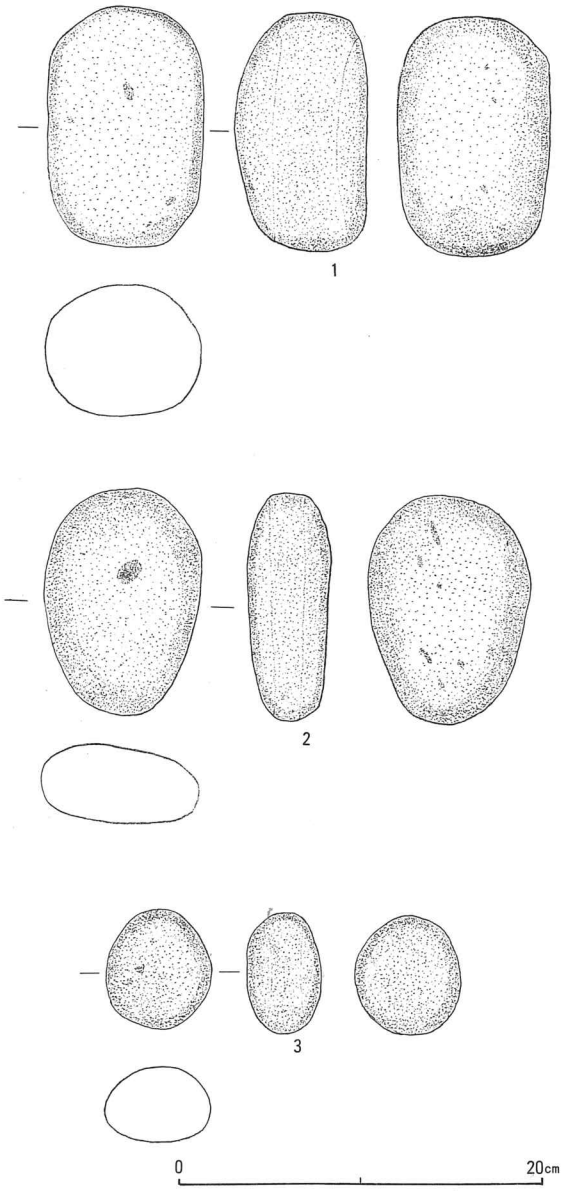
遺　物（第32～34図）

溝状遺構からは、土師器破片３点、弥生後期土器片２点、縄文時代後期の土器片、中期後半の土器片各20点、石鏃、磨石などが出土した。縄文中期の土器は無文が多く、その他文様のある土器は摩滅しており拓本のとれたものは１点のみに過ぎない。

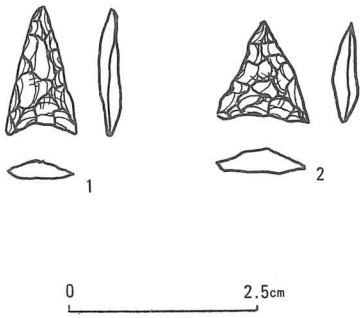
第31図１は縄文中期後半期の深鉢口縁である。口縁直下に隆帯の区画が施されて斜縄文が認められる。口縁部はゆるい波状となる。２～12は後期の土器でそれぞれ器肌が磨かれており、中期後半の土器とは一見して区分がつく。沈線文と細い縄文が施文され、隆帯に竹管で連続して列点文が加えられているものなどがある。後期前半期に比定される。



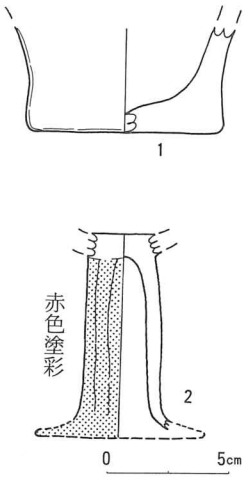
第31図　溝状遺構出土土器拓影図



第32図　溝状遺構出土土器実測図



第33図　溝状遺構出土土器鏃実測図



第34図　溝状遺構出土土器実測図

第32図は、本溝状遺構から出土した石器である。

1は、輝石がごま塩のように入っている安山岩である。手に持つには少し重いが内側に磨り痕が顕著に残っており、敲打痕が側面上下にある。

2は、扁平に近い形の敲石兼磨石である。座りの良い方を正面にしたが、正面に敲打痕がある。両方の面が共に磨られている。しかし、側面全体に敲打痕があるので、主に側面でなにかを敲打したと考えられる。

3は、小さくて手の中にすっぽり入ってしまう磨石である。座りの良い正面に磨られた痕がある。団子形の小さい丸石である。

第33図は石鏃を図示した。1・2共に小さい石鏃

でよほど注意をしなければ粘性の強い土から離れないので発見されにくい。1は長さ1.6㎝、最大幅0.92㎝、最大の厚さ0.25㎝で、2は長さ1.3㎝、最大幅1.15㎝、最大の厚さ0.33㎝となる。1は細長く、薄い無茎鏃で、側縁は細かい剥離が加えられている。2は1と比較して正三角形で厚く、剥離調整は細かい。両者共に抉りは浅い。このような小形の石鏃の用途は、小さな動物や鳥などの狩猟に使ったことが考えられよう。

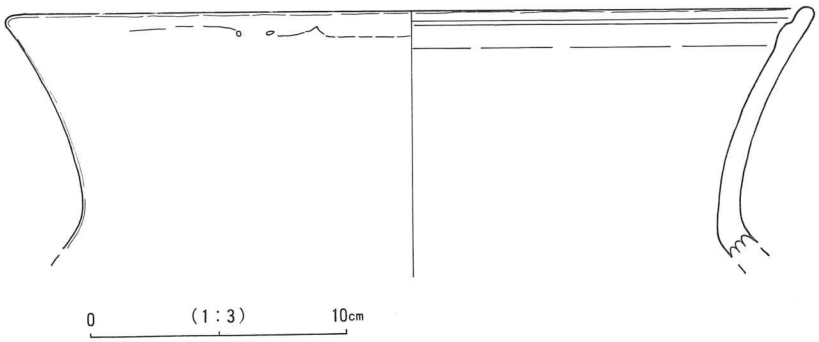
第34図は、底部に網代痕をもつ縄文後期の土器底部である。2は、赤く塗彩された高坏脚部の破片で弥生後期箱清水式に比定される。

溝状遺構は、縄文中期末から後期前半期の土器片、弥生後期、そして平安時代に至るまでの遺物を包含していた。遺構は道路幅のみの調査で全体を把握できないため、遺物の出土状態、土層のあり方などから想定すると、縄文中期の土器は摩滅したものが大部分で、拓本ができたのは1点であった。この点からも溝がなんらかの自然災害によって出現したのは後期に入ってからであろうとおもわれる。後期の遺構が検出されなかったこと、中期の遺構の上部に必ず後期の土器が入りこんでいたことからも、本遺構は縄文後期前半の所産であると判断されよう。また、付近にはため池が複数あり、かってこの地は青沼と呼ばれていたように水が豊富であったから、ある時期に溝が出現したり、また、一帯が湿地帯となった可能性が考えられよう。

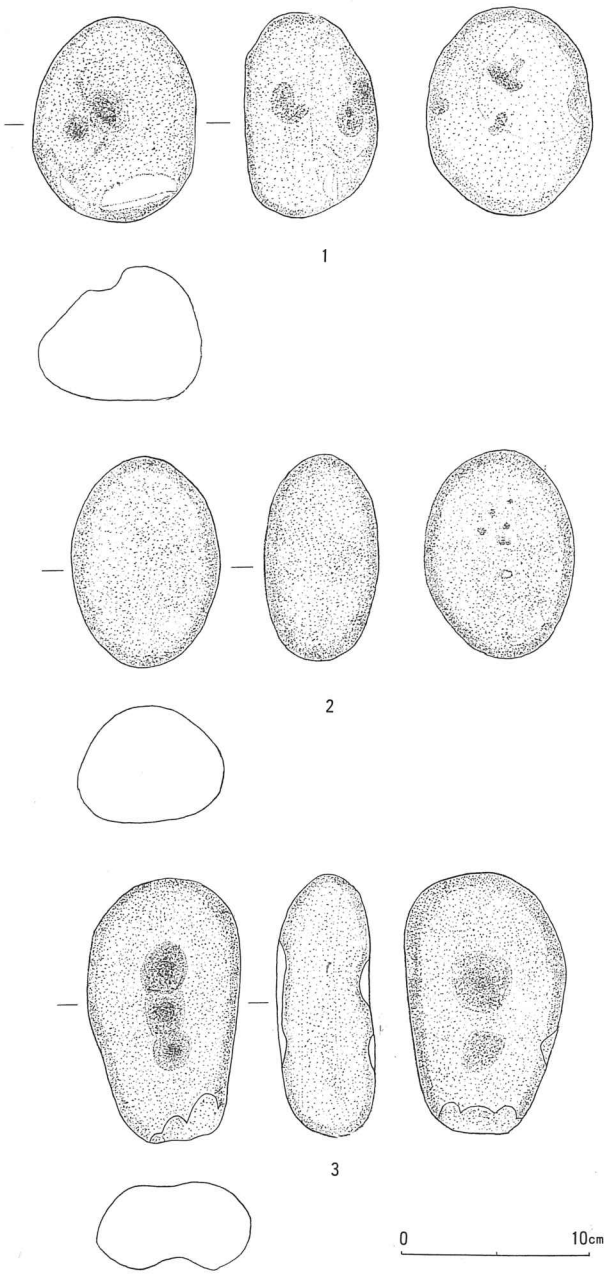
9）Ｊ３号住居址

溝状遺構の所在する場所からゆるやかな段を登ると果樹園と畑が広がる。その一角に耕作のできないところがあり、バックホーで掘っても歯が立たない固い岩の層にぶつかった、第2章遺跡の環境の中で由井俊三氏が記述しているように、「火山灰質の地層で露出は小さいが海の口泥流と判断される」とあるが、この岩盤から5ｍ離れた地点に、下に示したような礫の散乱した状態の場所にぶつかった。一帯は耕作土を剥ぐと黒色土に覆われていたため、掘り下げを試みたらこのように礫が散乱していたのである。さらに、道路幅ぎりぎりのところに土器が顔を出していたので、50㎝ばかり新設道路予定地をはみだして掘らせてもらうと、後期の土器口縁部と共に3個の磨石・凹石が出土した。これにより果樹園にかけての周辺に後期の住居址が存在していることが判明した。

第35図　礫散布状態図



第36図　調査区外出土土器実測図



第37図　調査区外出土石器実測図

遺物の出土状態から住居址は、耕作土の下部にあるとおもわれる。第１次調査区とは地形が異なり、標高は約３ｍ高くなる。したがって遺構を覆っている土層は浅く、耕作土20㎝直下が遺構覆土となる。

先ず、耕作土の下部にあった後期の土器からみてみよう。

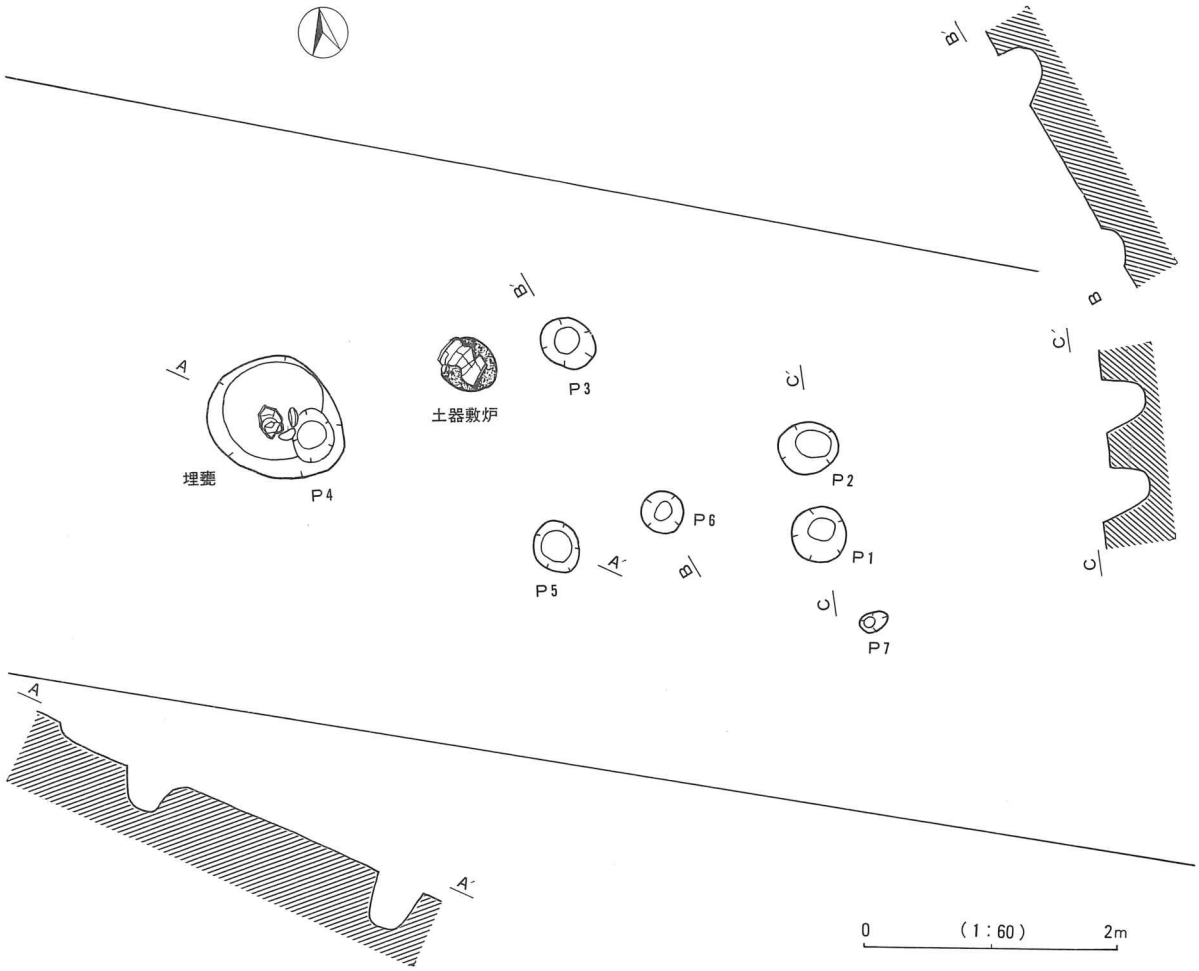
口径32㎝を測り、口辺が「く」の字状に外反している。内面の口縁直下に平行沈線があるだけで、内外面共に無文である。胴部に文様が施文されていたか、無文であるかはわからないが、頸部が「く」の字状になっている関係から、文様があるとおもわれる。土器はこの外に綱代痕のある底部破片が１点出土している。

１は、流紋岩を用いた敲石である。両面共に凹みがあり、先の尖ったものを叩き割ったかのように凹みの底が尖っている。裏面は磨られた部分が顕著である。側面の上端部も敲いたあとがある。

２は、安山岩の磨石・敲石である。手に持ちやすいてごろな大きさで、裏面の平担な面を使用しているが、あまり使われていないらしく、磨り痕も凹みも若干みられるだけである。

３は、石の中央に見事な凹みが複数生じている敲石である。下端部は割れているがこの部分も使用したであろう。石質が砂岩であるからこのような凹みができたとおもわれる。以上、調査区外の出土遺物をみてきた。

礫の散布状態は、60㎝×40㎝が最大で、続いて40㎝×30㎝、30㎝×20㎝、20㎝×10㎝、10㎝大となる。これらの礫は粘性の強い土中に密着していた。礫は溶結凝灰岩を主体に砂岩・安山岩・流紋岩などである。さらにこの礫散乱地区を東側に黒色土の部分のみを掘り下げてゆくと、割れてはいるがかなりまとまった状態で土器が出土した箇所が２地点、磨製石斧、石鏃なども発見されたが、黒色土中の土器破片の出土は少なかった。２箇所に土器がまとまって出土し、その内の１箇所が土器敷炉であることが焼土の堆積状態によって



第38図　Ｊ３号住居址実測図

わかったので、住居址であることが確実となった。

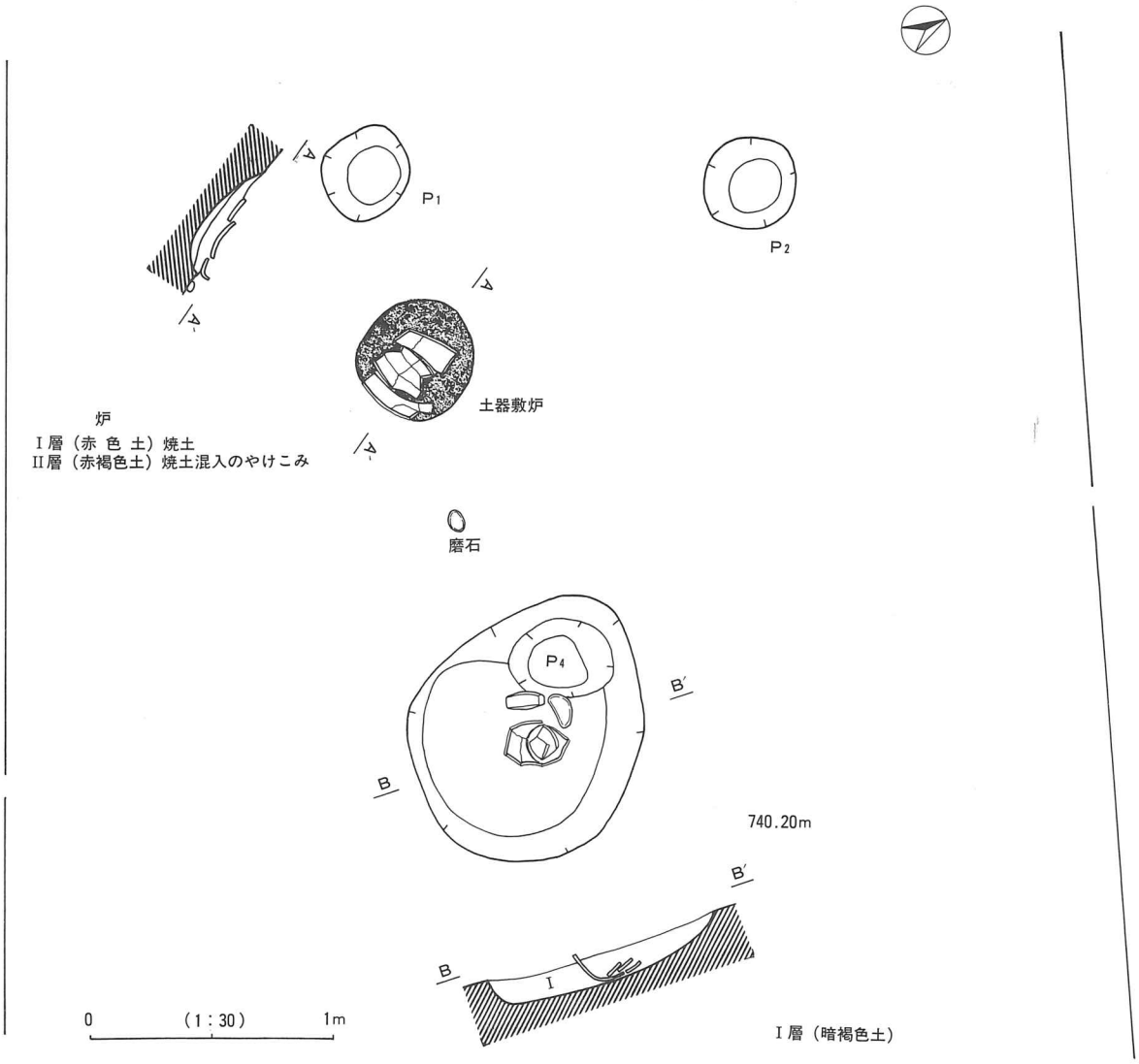
柱穴の検出のため床面を精査した結果、配列の不規則な穴が６個みつかった。柱穴の検出は床面の上に粘性が強く小石混りの暗褐色土がところどころを覆って、その土が固く床面との区別がつかず、非常に困難をきたした。

P_1～P_5は径40cm内外、深さ35～40cmを測り、P_6は径30cm、深さ10cmと貧弱である。P_7は径15cm～22cmで、深さ20cmで小形ながら支柱穴として機能したであろうとおもわれる。

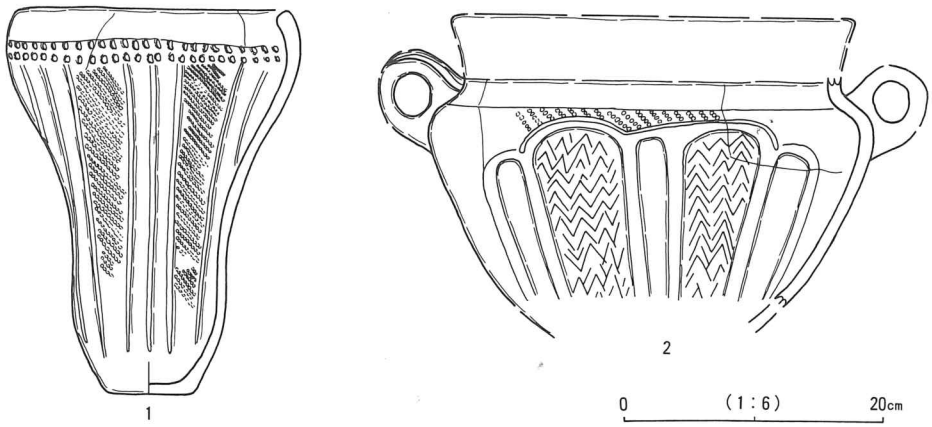
覆土は、第35図の東端のように耕作土を10cm～15cm剥ぐと黒色土が10cm程堆積しており、これが覆土である。この地点はちょうど東側からも西側からもゆるやかに傾斜している中間地点の凹地にあたるため、表土である耕作土の色も周囲に比べると黒味がかっていた。このことはある時期に凹地に水が溜り、植物などが腐植したことを裏付けている。

上の図は、埋甕と炉の拡大図である。炉は、土器を敷いた状態にに並べてあり、土器の下は赤色を呈した焼土が５cmの厚さで堆積していた。掘りこんだ様相も石囲いもなく、土器を敷いたのみで直径50cm足らずの小形で簡単なつくりの炉である。

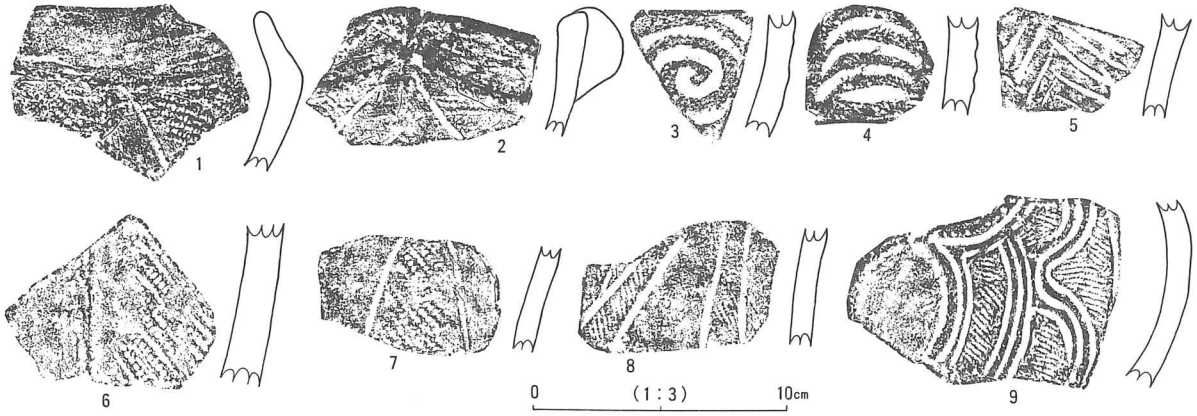
埋甕と推定される地点は、炉から1.2m東寄りに正位の状態で甕が埋まっていた。耕作によって深鉢上部は割れて一部分のみ口縁部が残っていたので、あるいは完形品を埋めたとおもわれる。この埋甕の横に15cm×７cmの石が２個埋め込まれ、その際にP_4の柱穴がある。埋甕を埋めた住居址に供なうものかは不明である。本遺構は



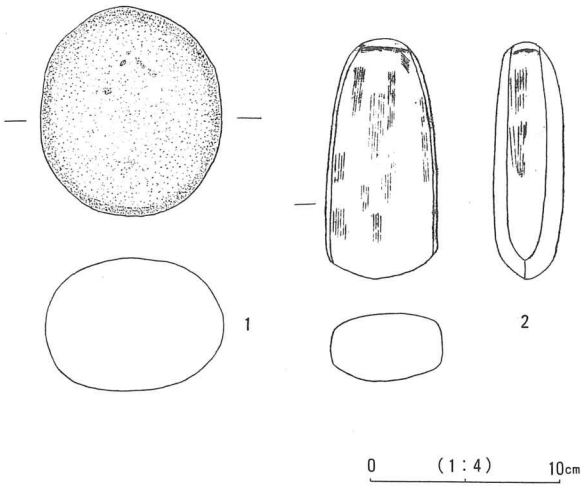
第39図　Ｊ３号住居址・埋甕実測図



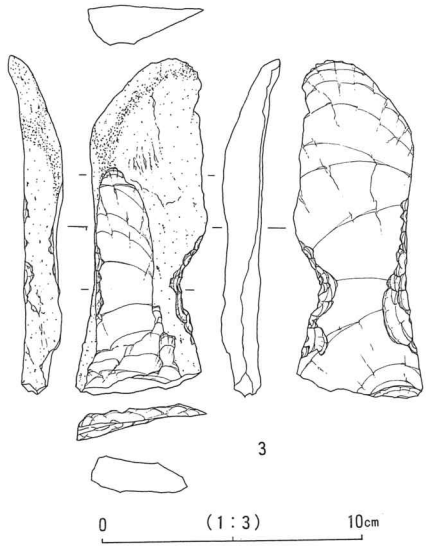
第40図　Ｊ３号住居址出土土器実測図



第41図　Ｊ３号住居址出土土器拓影図



第42図　Ｊ３号住居址出土土器実測図



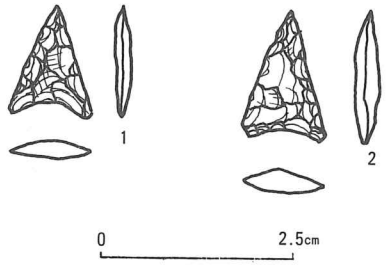
輪郭やその他不明な点が多いが、Ｊ３号住居址と命名した。尚、礫は散布状態や調査区のトレンチが南側が一段高くなっていることから、南方の斜面から崩れ落ちたことが考えられる。

遺　物（第40～44図）

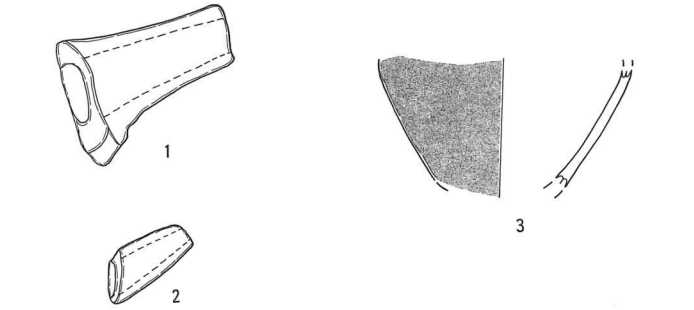
第40図１は埋甕を示した。口径21㎝、底径6.5㎝を測る。器形は口縁部が湾曲し、頸部から胴中央にかけてゆるやかに細くなるキャリパー型となる。文様は口縁部が無文帯でその直下に二列の連続刺突文を施している。頸部から胴下にかけては沈線の懸垂文とその間に斜縄文が施されて曽利式の沈線文系とは異なり加曽利Ｅ式の影響が強い。口縁部の一部が割れて残っていたので、正位の状態に完成品が埋められていたものとおもう。

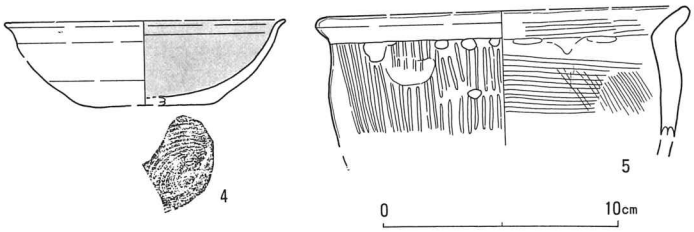
２は、炉に敷いてあった大形の両耳広口壺である。口縁部の一部とおもわれる破片も出土したので、復原実測が出来たが残念ながら耳が出土しなかったので両耳は推定である。頸部は肩の張った器形であり、文様は胴上部に縄文が、その下から大・小の逆Ｕ字文が交互に連続して配され、大の逆Ｕ字文の区画の中に、沈線の細い矢羽状条線文が施文されている。口径31㎝、器高27㎝が推測される。

第41図の拓影図に９点の土器片を示した。１～２は、口縁部無文で区画に細い隆帯を施し、胴部文様は頂部が鋭利な弧線文と縄文が施されている。３～５は、沈線で渦巻文・横位の条線文・綾杉文が描かれた破片であり、



第43図　Ｊ３号住居址出土石鏃実測図





第44図　Ｊ３号住居址出土その他土器実測図

６・７は１・２と個体はちがうが同系統の文様である。８・９は斜縄文の縄目が小さくなり、８は沈線の狭い区画内に縄文が施文されているので後期に入る。９は、胴部が湾曲した器形の深鉢であろう。隆帯と沈線が交互に描かれており、内・外面共に器肌が磨かれているので後期に入るとおもわれる。

第42図１は炉から40㎝西南寄りに出土した形の整った磨石である。石の面全体にブツブツの穴があいてきめの荒い状態で、磨られた痕跡が少なく敲石として利用したとおもわれる。石質は、角閃石安山岩である。２は緑色岩の磨製石斧である。刃先は使用痕で潰れている。着柄の部分に磨り痕がある。

３は、着柄痕のある鎌状または鉈状石器である。正面は自然面を利用しているが、着柄の部分は剥離調整で抉りを入れ、反対側の左の盛り上がったところと下端部にかけて剥ぎ取り着柄しやすいようにしている。裏面は石の面にそって剥ぎ取り、刃の面がうすく鋭利につくり出され、刃こぼれも観察できる。

第43図は石鏃である。両者ともに小形できめ細かく剥離された優品である。１は、厚さが0.2㎝とうすく、２は、0.3㎝でいくらか厚い。長さは１が1.44㎝、２は1.6㎝である。

第44図は、Ｊ３号住居址・礫群中から出土した土器片である。１・２は注口土器の注ぎ口の破片である。１は注ぎ口が６㎝を測るので本体はかなり大きなものになる。２は、注ぎ口が３㎝なので１の半分で小形となる。

３は、赤く塗彩された高坏の坏部である。付近に弥生時代後期の住居址があると想定される。

４は、糸切り底部で内面黒色の坏である。器厚は0.2㎝から0.3㎝を測り非常にうすい。５は、櫛歯状工具の調整痕が残る小形甕の破片である。４、５は共に平安時代に比定される。

以上のように、礫散布地・Ｊ３号住居址の覆土中からはさまざまな時代の遺物が出土したが、Ｊ３号住居址の所産期を比定できるのは、炉に敷かれた両耳広口壷，埋甕から縄文中期末にあたると判断される。埋甕の深鉢、両耳広口壺は曽利的だが関東の加曽利Eの影響もある。

（島田　恵子）

第３表　月夜平遺跡出土石器一覧表

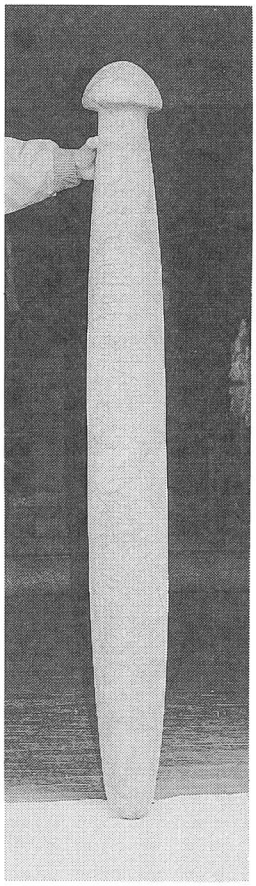
挿図番号	出土地点	種　別	石質	最大長（cm）	最大幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）(mg)	欠損状態	備考
9－1	Ｊ１号住居址	磨石・凹石	安山岩	16.2	15.0	10.0	3640 g		
16－1	Ｔ１号特殊遺構	磨石・凹石	安山岩	14.0	7.0	4.2	700 g		
16－2	Ｔ１号特殊遺構	磨　石	閃緑岩	12.6	8.0	6.0	770 g		
16－3	Ｔ１号特殊遺構	磨　石	閃緑岩	7.6	6.6	5.8	510 g		
16－4	Ｔ１号特殊遺構	磨　石	安山岩	9.0	7.6	5.8	460 g		
16－5	Ｔ１号特殊遺構	鍬	安山岩	12.5	7.0	1.7	72 g		
21－1	Ｔ２号特殊遺構	磨石・凹石	砂岩	(11.0)	(6.4)	(4.6)	470 g	半欠	
21－2	Ｔ２号特殊遺構	磨　石	安山岩	8.2	7.2	4.0	390 g		
28－1	Ｈ２号住居址	磨石・凹石	安山岩	9.2	7.0	5.2	390 g		
32－1	溝状遺構	磨　石	輝石安山岩	13.4	8.6	6.4	1250 g		
32－2	溝状遺構	磨　石	安山岩	12.4	8.6	4.6	650 g		
32－3	溝状遺構	磨　石	安山岩	6.6	5.8	4.2	190 g		
33－1	溝状遺構	石　鏃	黒曜石	1.6	0.92	0.25	300mg		
33－2	溝状遺構	石　鏃	黒曜石	1.3	1.15	0.33	400mg		
37－1	調査区外	磨石・凹石	流紋岩	10.8	8.7	7.0	830 g		
37－2	調査区外	磨　石	安山岩	11.2	7.6	6.0	640 g		
37－3	調査区外	磨石・凹石	砂岩	14.0	8.4	5.0	830 g		
42－1	Ｊ３号住居址	磨　石	角閃石安山岩	9.6	9.4	7.0	950 g		
42－2	Ｊ３号住居址	磨製石斧	緑色岩	12.6	6.0	3.6	540 g		
42－3	Ｊ３号住居址	鎌か鉈	流紋岩	12.4	4.4	1.5	115 g		
43－1	Ｊ３号住居址	石　鏃	黒曜石	1.44	1.13	0.2	200mg		
43－2	Ｊ３号住居址	石　鏃	黒曜石	1.60	1.05	0.3	250mg		

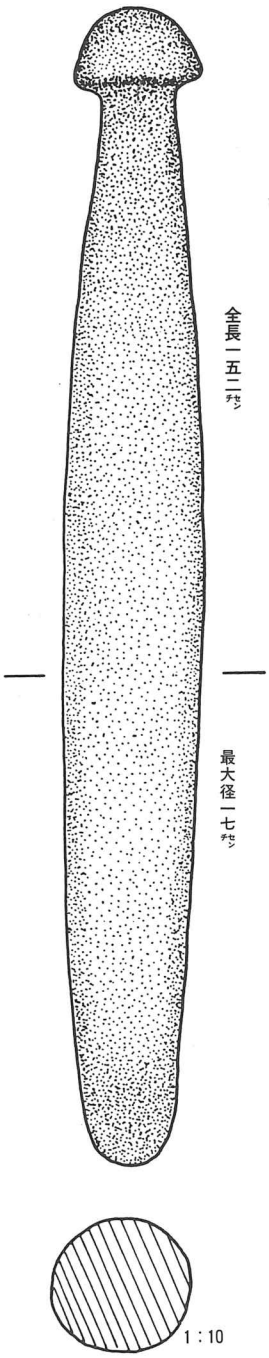
第5章　ま　と　め

月夜平遺跡は、谷川左岸に形成された洪積層の段丘に所在し、縄文時代中期から後期、弥生時代、古墳時代、奈良～平安時代、中世にまで連続する大遺跡である。この遺跡が注目されたのは、下の図・写真に示した石棒が出土したことによる。石棒はどんな状態でどの場所から出土したのであろうか。それは昭和８年ごろの事であった。青沼村で入沢・十日町線の道路改修工事を行ない、入沢字上磯部地籍で田口用水の石垣が一部分改修され、その根掘り作業のとき土の中に横倒しになっている石棒を発見した。昭和９年４月15日、工事請負業者が大宮諏訪神社のお祭りの日に神社へ寄贈奉納し、神社の宝物として現在に至っている。石棒の出土地点は、月夜平遺跡の北西端側に位置し、このあたりは磯部という地名が示すように、沼があり豊かな水に恵まれた地帯であった。石棒は長い歳月水の中につかっていたため、酸化鉄が付着し、縞のような文様をつくりだしている。石棒の長さは152㎝、最大径17㎝で、男根の形状が芸術的に型どられ、全体がきれいに研磨されている。佐久町北澤出土の大石棒は全長223㎝を測り、大きさでは日本一の大石棒であるが、月夜平遺跡出土の石棒は精緻な造りと形状の美しさにおいては、まさに日本一といえよう。石質は付近の山から産出する志賀溶結凝灰岩を素材としている。このような芸術品を造り出す石材が容易に入手できる土地柄であったからこそ、日本一美しい石棒を生み出したのである。

今回の発掘調査は、上記のような石棒が出土した月夜平遺跡の最北端側に、新しい道路が造成されるので期待を抱いて発掘調査にのぞんだ。しかし、幅４ｍの調査区は遺構が全面調査区内にかかることはなく、住居址の三分の一であったり、二分の一であったりと中途半端であるため、全体を見渡せない不便さがある。とくに平成７年度第１次の調査区一帯は、住居址とおもわれる遺構から、縄文中期末の土器片はたくさん出土するが、縄文後期、弥生後期、土師器が混入していた。プラン確認面は黒色土で覆われており、少しの色の変化も見逃すことなく、目を据え、土の固さをも見比べ精査したが、納得のゆく答えはかえってこなかった。一時期谷川の氾濫原であったことを示すかのように、土層上部に漆黒色の土が堆積しており、耕作土直下には平安時代後半の住居址があった。これにより、平安時代以前にこの地は自然災害に見舞われた可能性があることがわかった。

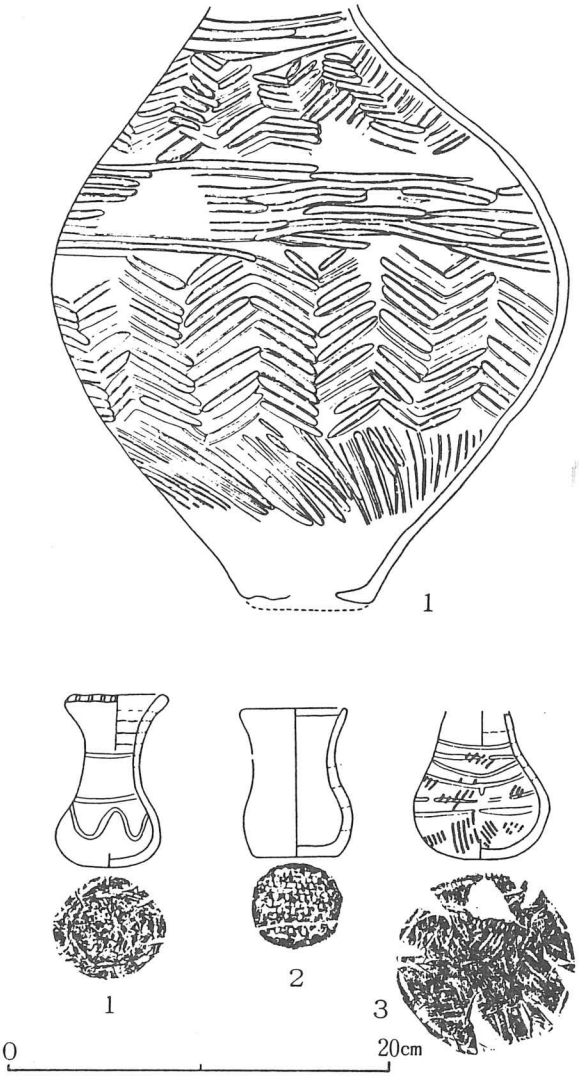
第１次調査区からは、縄文時代中期末の住居址２軒、集石のある特殊遺構２、平安時代後半住居址２軒が検出された。検出住居址の平面プランは、二分の一や三分の一では推定となり不安が残るため、あえて表にはあらわさないで各遺構の記述にとどめた。





第45図　月夜平遺跡出土の縄文後期の磨製大石棒

第２次調査は、道路工事の進行から平成９年度に行なわれた。地形的な関係から地表より１ｍ以上もある下に溝状の落込みが発見されたが、ほんの少しの範囲だったために、状況だけの記述にとどめたが、あるいは水の溜っている沼地の端だった可能性も考えられる。前述したが磯部という地名のように、月夜平にはため池が多かったが、近年住宅を建設したので埋められてしまった。その他に、住居址１軒（中期末）が検出された。住居址は耕作土の下の層から検出され、第１次調査区とは地形的に異なる。遺物はＪ１号住居と比較して出土が少なく、炉・埋甕の検出により住居址であることが判明した。さらに住居址のすぐ際まで礫が散乱しており、その西側の一角はバックホーでも刃が立たない岩盤があり、この岩盤を避けた北東一帯に住居が構築されたのであろう。それを裏付けるように、新造成の道路幅より北側を50㎝ばかり、掘ると縄文後期の土器、石器が出土した。



第46図　月夜平遺跡出土の弥生中期初頭の土器

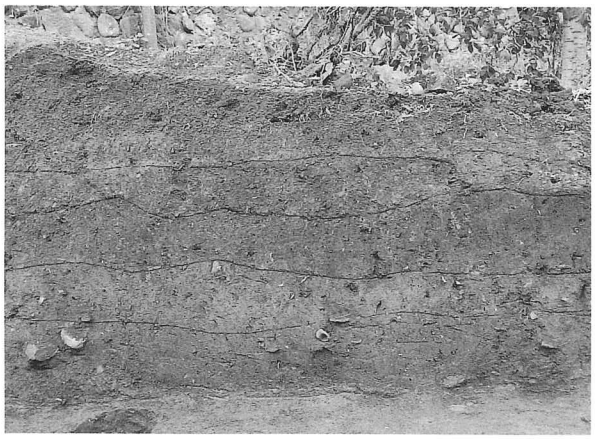
今回の調査によって判明したことは、月夜平遺跡の範囲は一段下った窪畑・三枚田の果樹園や畑の付近まで広がっていることが明らかになった。谷川の氾濫がたびたびこの地をおそったことも、腐植土の堆積によって確認できた。さらに、遺跡の年代は中期後半という漠然としたものであったが、中期末の加曽利Ｅ系の影響が強いが、しかし曽利系の影響もあり流動的である。

また、月夜平遺跡は右の図に示したように、弥生中期初頭の東海系の土器が出土しており、弥生文化の先駆の遺跡として佐久町の館遺跡・中原遺跡と共に注目されている。弥生中期のはじめ月夜平遺跡で生活していた人びとは、縄文の文化で集落を営んでいた。ある日、峠を越えて稲作と金属器の新しい文化をもった東海地方の弥生人が移入してきた。やがて人びとは仲よくとけ合って新しい文化をつくり出したのである。１の壷形土器は、器厚が薄く脆い感じがすること、土器の器肌をザラつかせ指痕を残していることが東海地方の水神平式土器の特徴を出しているが、文様をつけるため東海地方は二枚貝の背を利用しているが、月夜平には貝がない。そこで貝と同じ文様が描ける工具を考え出したのである。土器の形も東海地方に似てはいるものの、微妙な差があり独特な雰囲気がある。この土器は、再葬墓に骨を入れた骨壺と考えられている。底が剥ぎ取られた状態になっており、死者の魂を封じ込めないという意味があったとされる。この壷と共に２～４のミニチュア土器が出土しているが、これらは死者に手向けた副葬品である。

月夜平遺跡は、近年住宅地化され、このような遺物が出土した主体部は守られ、果樹園、畑地として耕作されているが、今後どうなるか危惧の念はぬぐえない。　（島田　恵子）

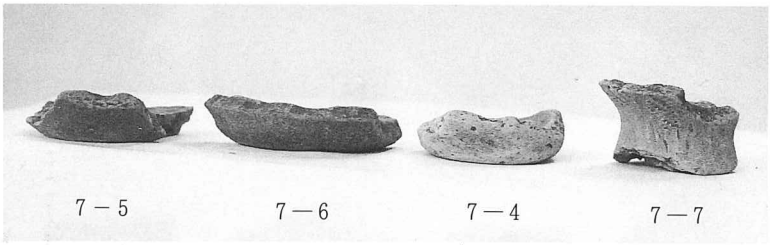
図版１　Ｊ１号住居址と出土遺物

Ｊ１号住居址

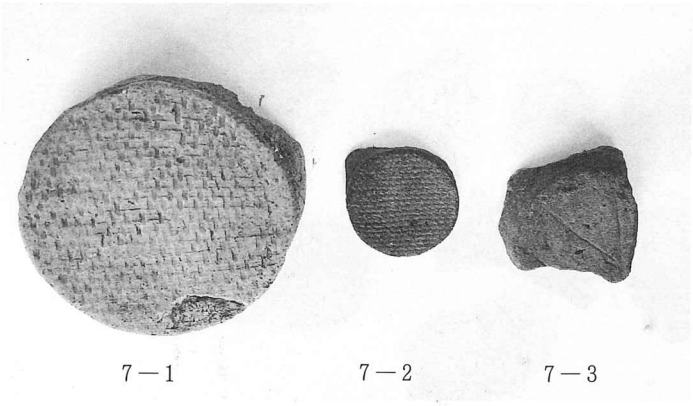


表土からＪ１号住居址覆土までの層位

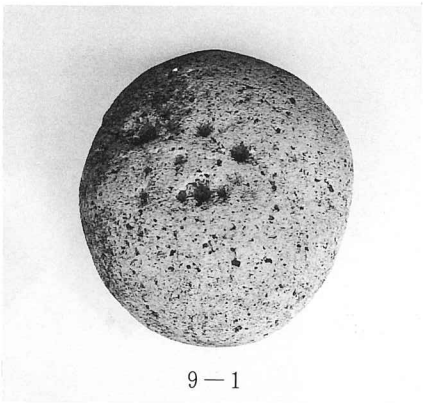
把手出土状態



土器底部

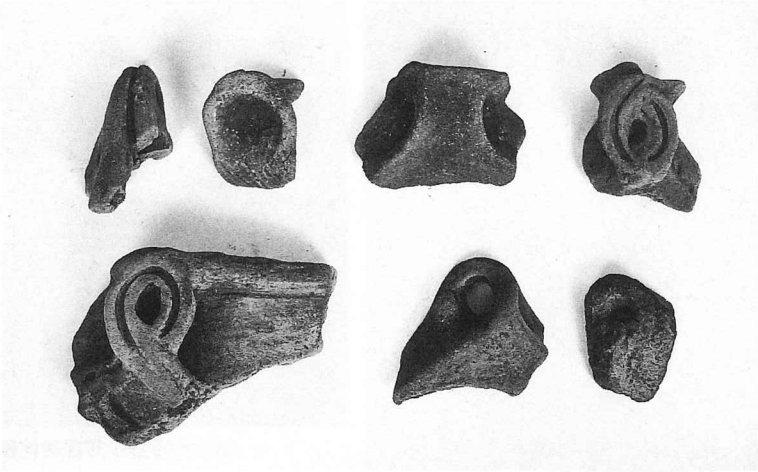


網代・木葉痕の土器底部

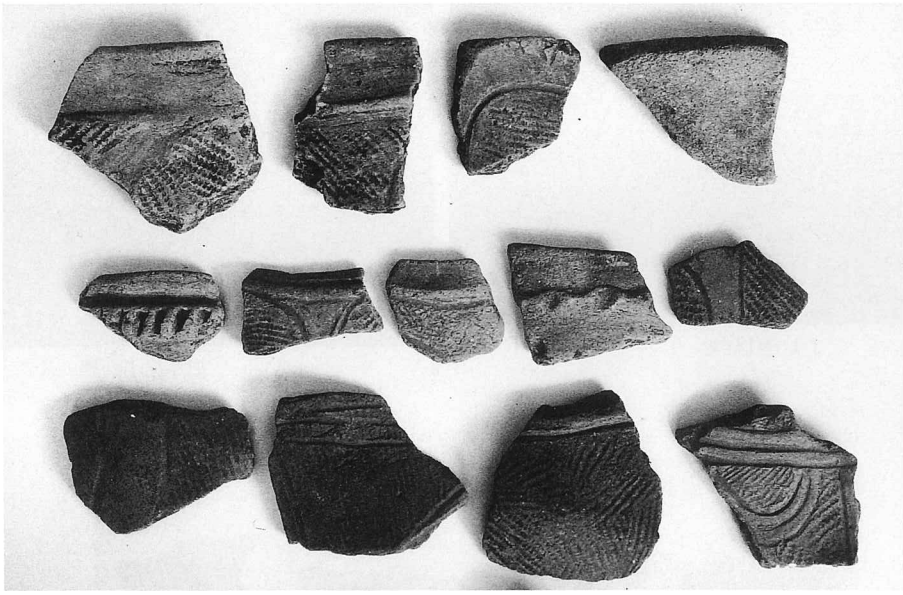


磨石・敲石

図版2　J1号住居址出土土器片



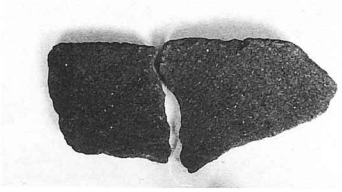
把　手　　8－1～7

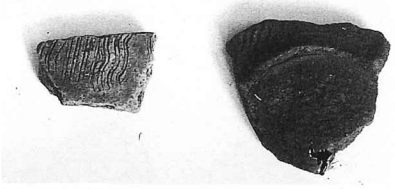


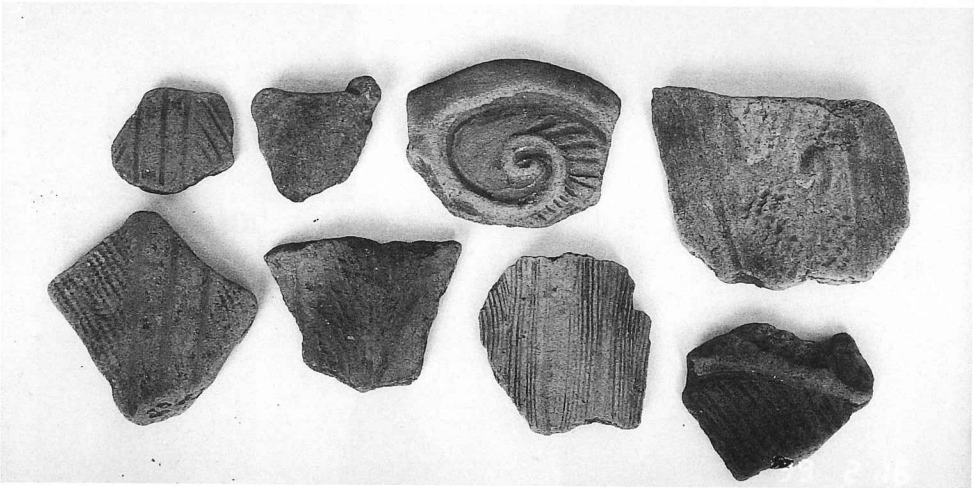
J1号住居址出土土器片

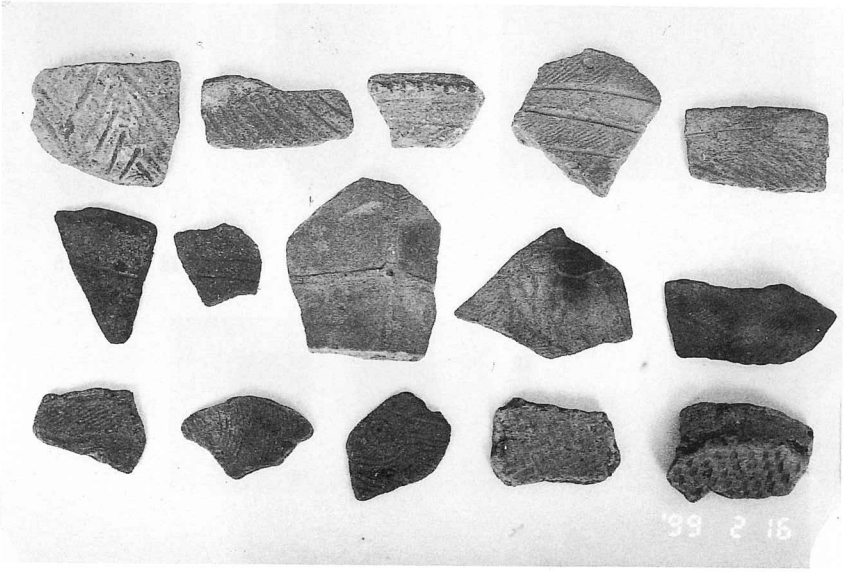
図版3　J2号住居址出土土器およびトレンチ出土土器片

J２号住居址









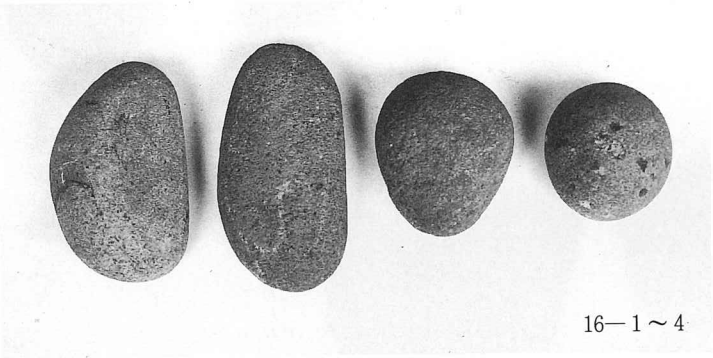
トレンチ出土土器片

図版4　T1号特殊遺構と出土遺物

T１号特殊遺構

石鏃出土状態

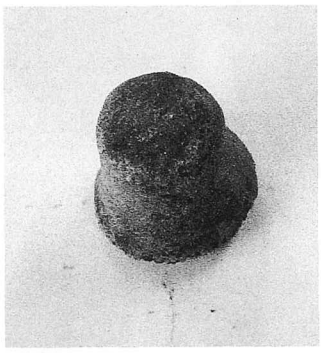
耳飾り出土状態

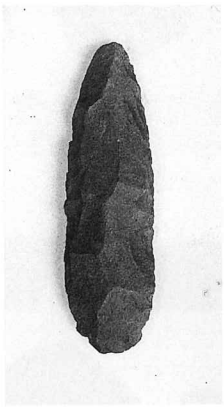


16—１～４

磨　石

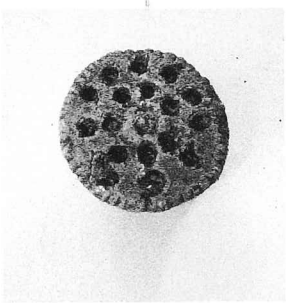
17—１



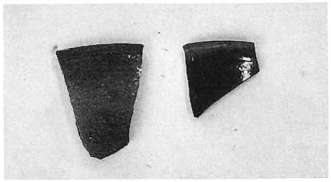


石　鏃　16—５

土製耳飾り



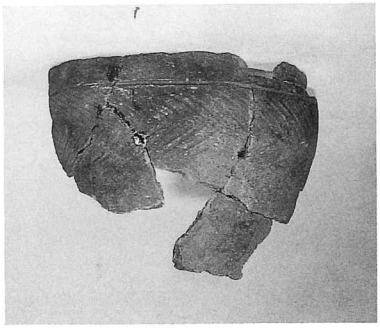
縁釉陶器



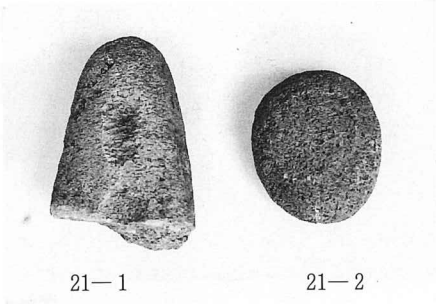
18～１～２

T 2 号特殊遺構

石器出土状態



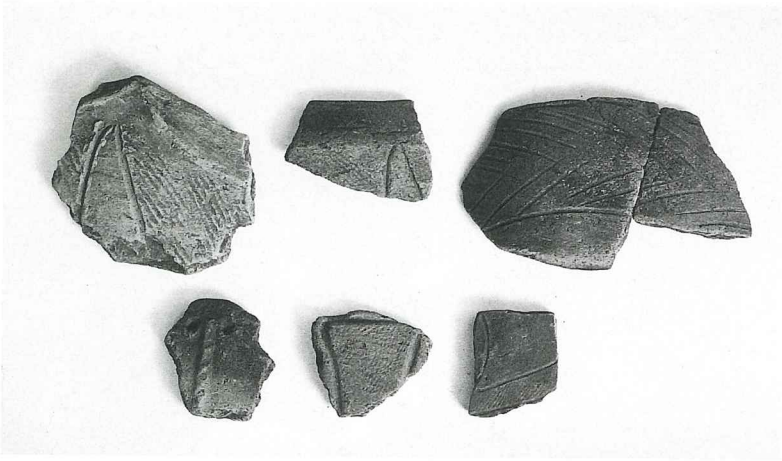
土　器　　20—7



21—1　　21—2

磨石・凹石

図版6　T1号・T2号特殊遺構・溝状遺構出土土器片

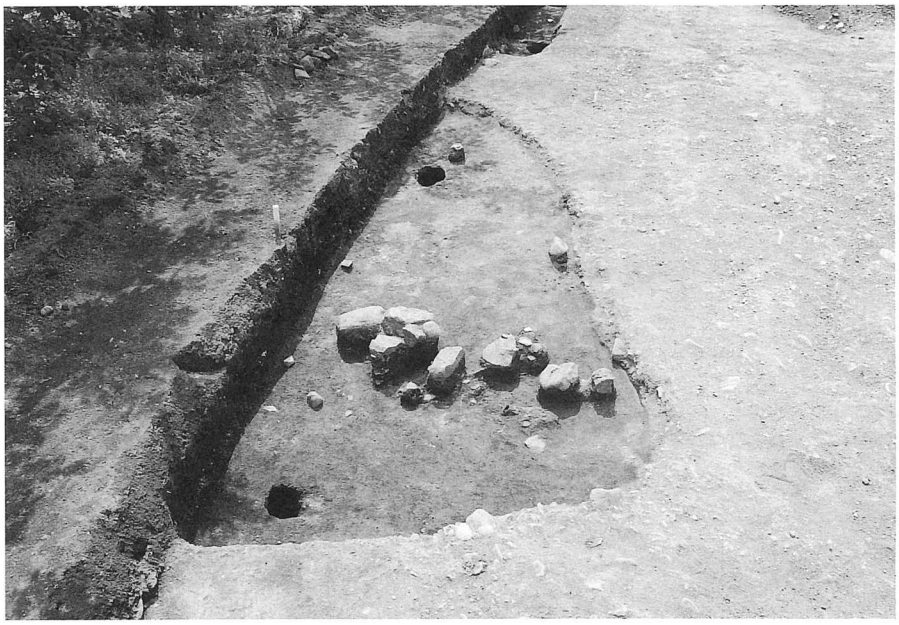


T１号特殊遺構出土土器片

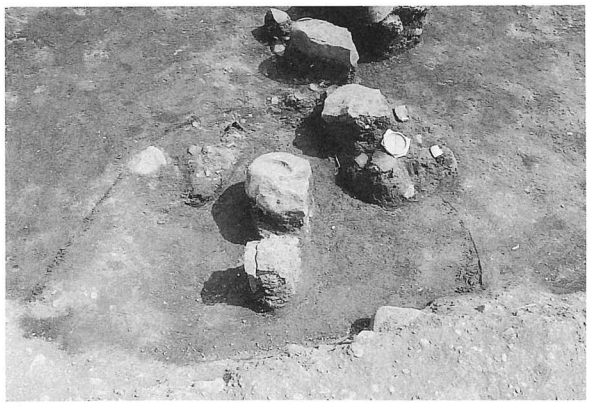
T２号特殊遺構出土土器片

溝状遺構出土土器片

図版７　Ｈ１号住居址とカマド・灰溜施設

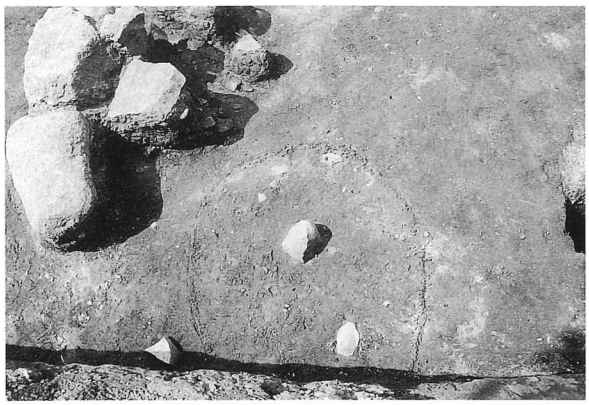


Ｈ１号住居址



Ｈ１号カマド

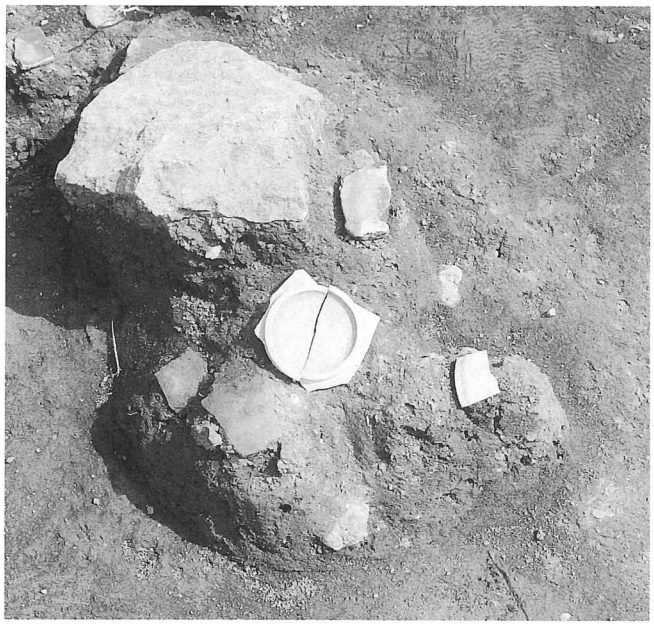
Ｈ１号カマド掘り下げ



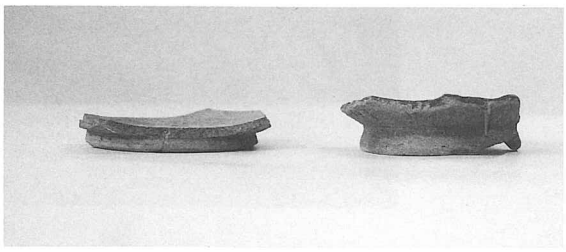
Ｈ１号灰溜施設

灰溜施設完掘

図版８　Ｈ１号住居址の遺物とＨ２号住居址の遺物



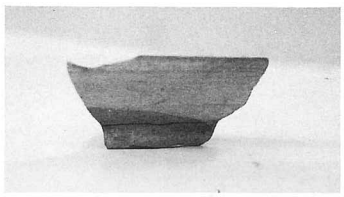
Ｈ１号住居址土器出土状態



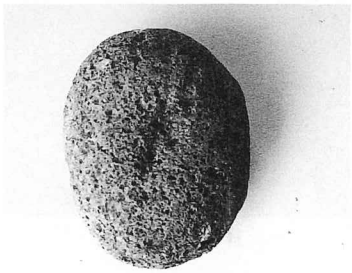
2　灰釉陶器と土師器埦　2

Ｈ２号住居址

出土状態と灰釉陶器埦



27—1



28—2

磨石

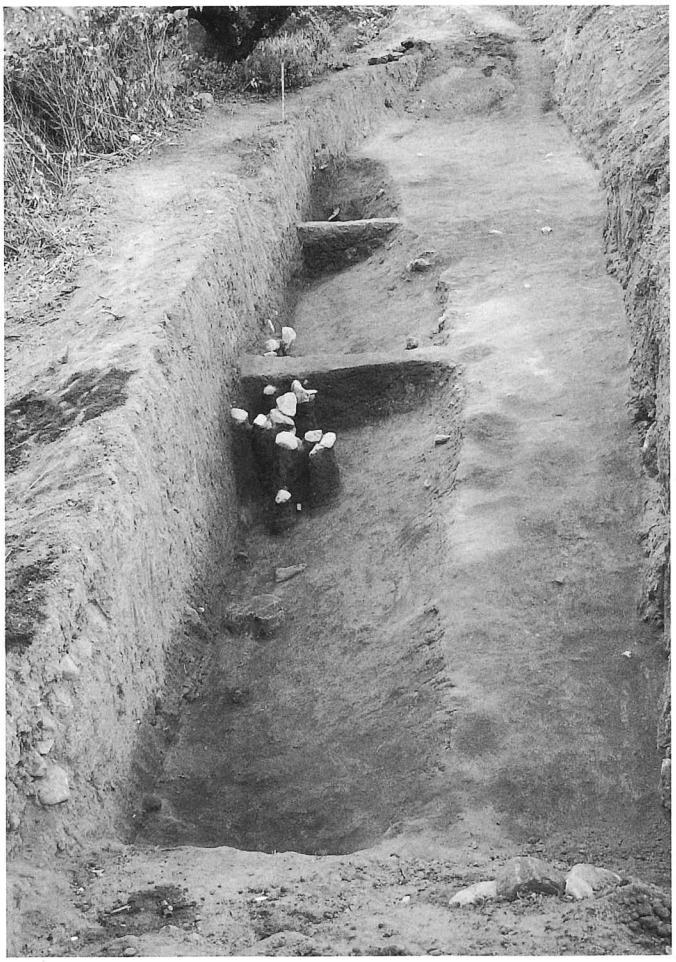
図版9　層位・遺構観察のトレンチ

谷川の氾濫のあとを示す黒色土

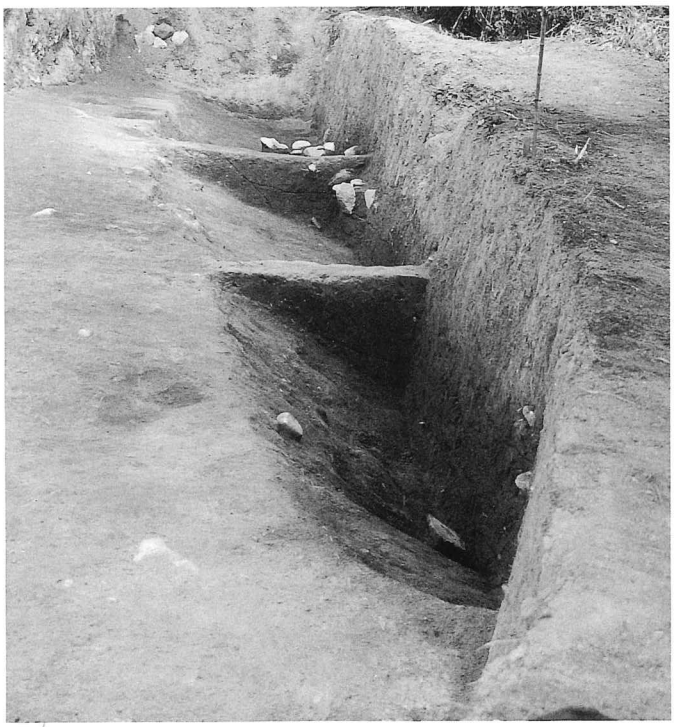
複雑な状況を示す地層

ところによっては大きな礫が埋まっている

図版10　溝状遺構と出土遺物

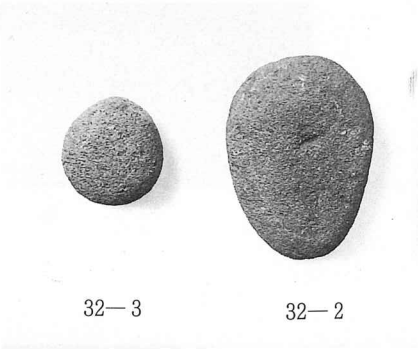


溝状遺構（西方より）



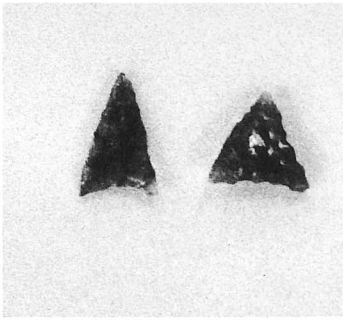
（東方より）

32—1



32—3　　32—2

磨　石



石　鏃　33－1・2

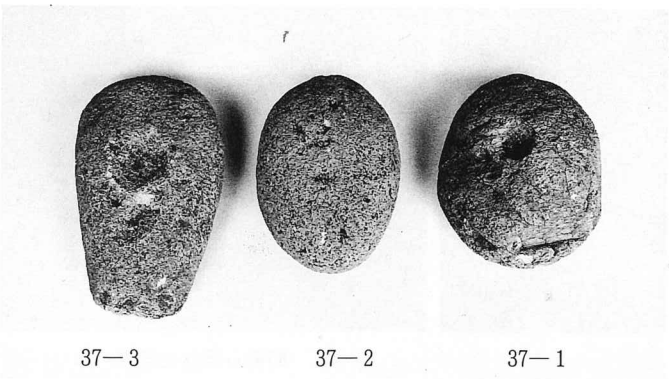
34—2

弥生時代高坏の脚

図版11　礫群集石地点と調査区外出土遺物

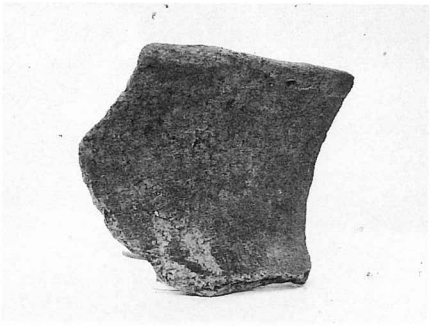
礫群集石地点全景

調査区外出土遺物



37—3　37—2　37—1

磨石・凹石



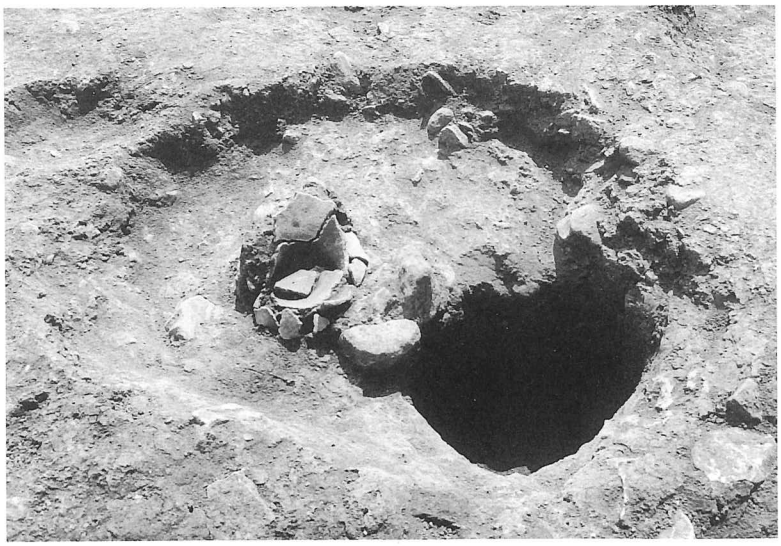
36—1

縄文後期の深鉢口縁

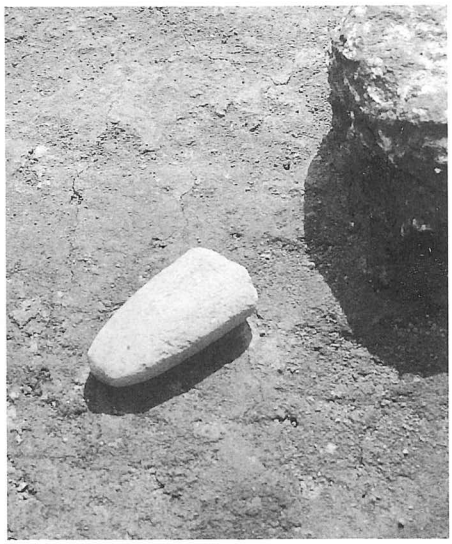
図版12　J3号住居址

J3号住居址

柱穴・炉・埋甕完掘状態



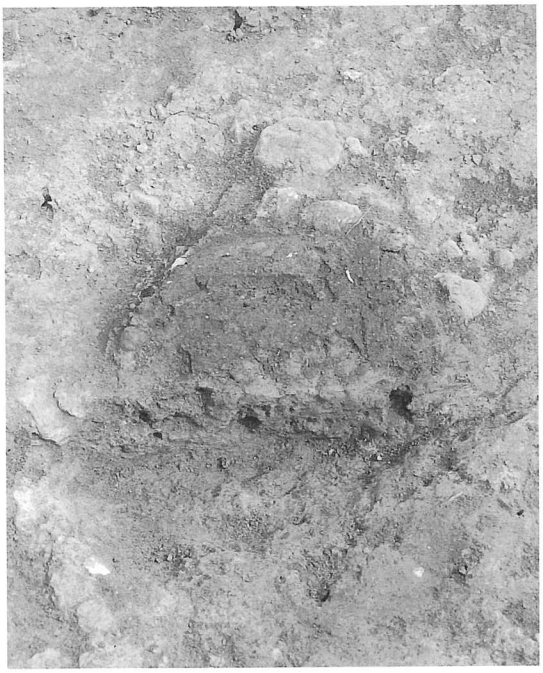
埋甕出土状態



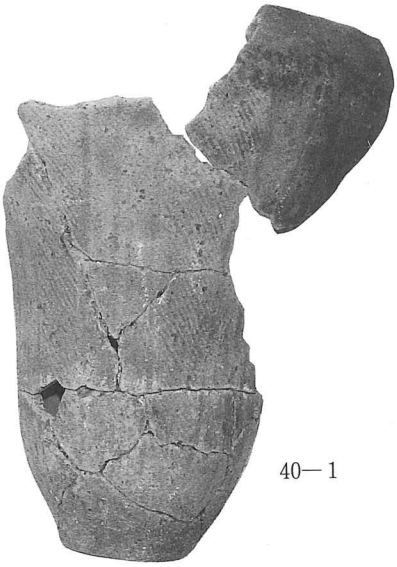
磨製石斧出土状態

炉・埋甕の周辺

土器敷炉

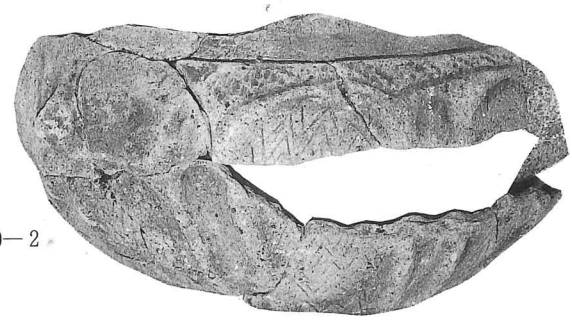


焼土の堆積状態



40—1

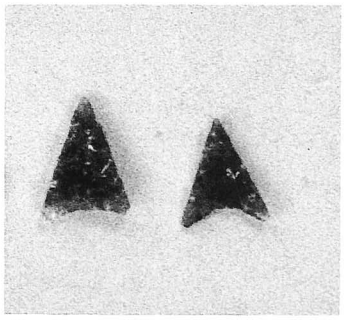
埋甕の土器復原



40—2

土器敷炉の土器復原（両耳壺）

図版14　J3号住居址出土遺物

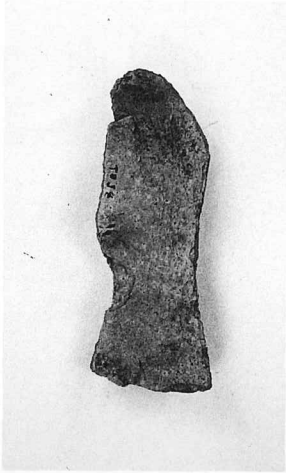


43－1・2　石　鏃

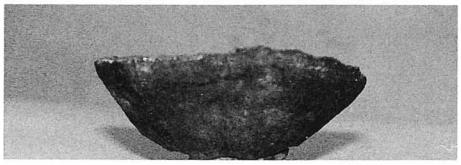
磨　石　42－1

注　口　44－1・2

磨製石斧　42－2

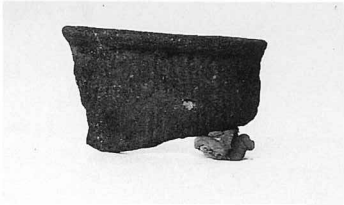


鎌（鉈）状石器　42－3

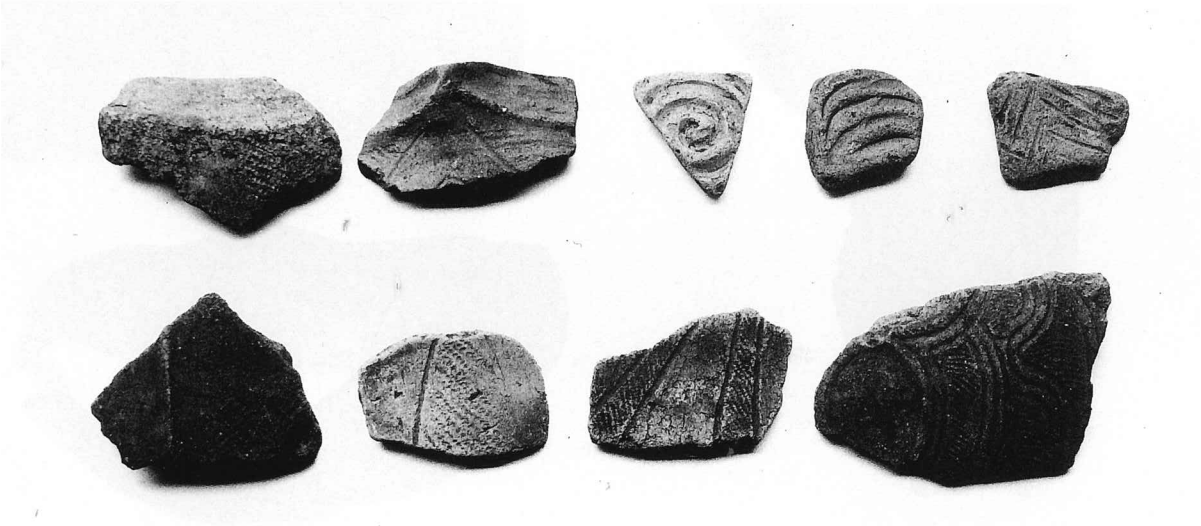


弥生後期高坏の坏部　44－3

土師器坏　44－4

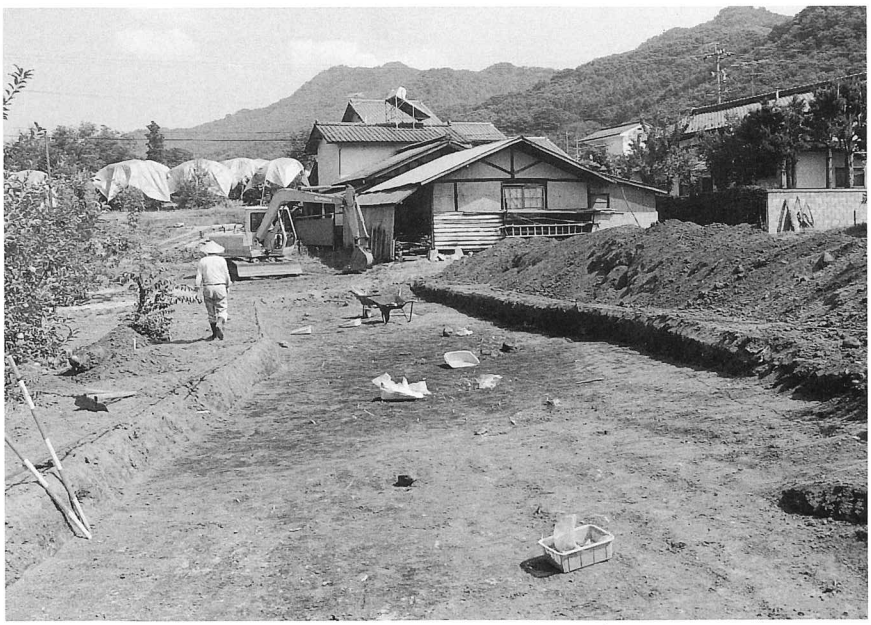


土師器小形甕　44－5



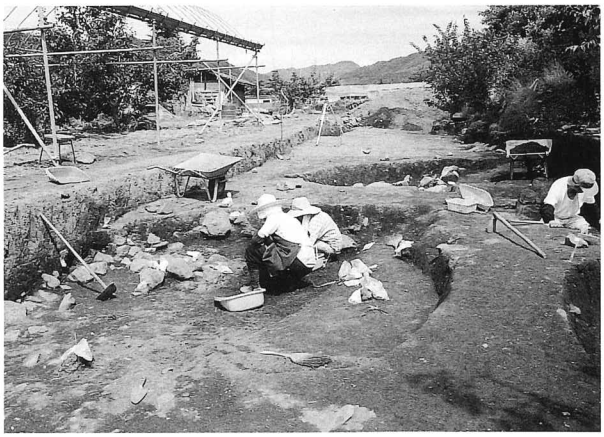
J3号住居址出土土器片

第1次調査区近景



第2次調査地点

第1次現地説明会



第1次発掘調査風景

月夜平遺跡

発行日　平成11年3月20日
編集者　月夜平遺跡発掘調査団
発行者　臼田町教育委員会
印刷所　臼田活版株式会社